

伊那西部農業開発地区内

小出城(城南)・浜射場遺跡

— 緊急発掘調査報告書 —

1975

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

今回、広域営農団地農道通過地区である伊那市西春近城・小出城（城南）遺跡、西春近宮の原部落・浜射場遺跡発掘調査報告書の完結するにあたり、御貢献をいただきました調査団の諸先生をはじめ、直接調査にたずさわられた作業員、また調査の進行に御協力をおしかなかった、南信土地改良事務所職員一同、地元の委員のかたがたにその労をねぎらい申し上げるとともに、心から敬意を表します。

伊那市西春近地籍の地形はその大部分が、中央アルプス特有の環境を形成するゆるやかな扇状地帯であって、ここには多くの原始・古代の遺跡がいたるところに点在しています。

しかるにこの数年来、西春近地区は中央高速道路、大規模農道、土地改良事業等の大きな開発が次々と急速度で行なわれ、貴重な遺跡が無残に破壊、消失してゆく事実は決して見逃されるべきものではありません。

この小出城（城南）、浜射場遺跡群が消え去ったいま、友野良一先生をはじめとする調査団のかたがたのご努力により、学問的にも高く評価されるべき資料としてこの報告書の発刊は誠に喜びに堪えません。

昭和 50 年 3 月 10 日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

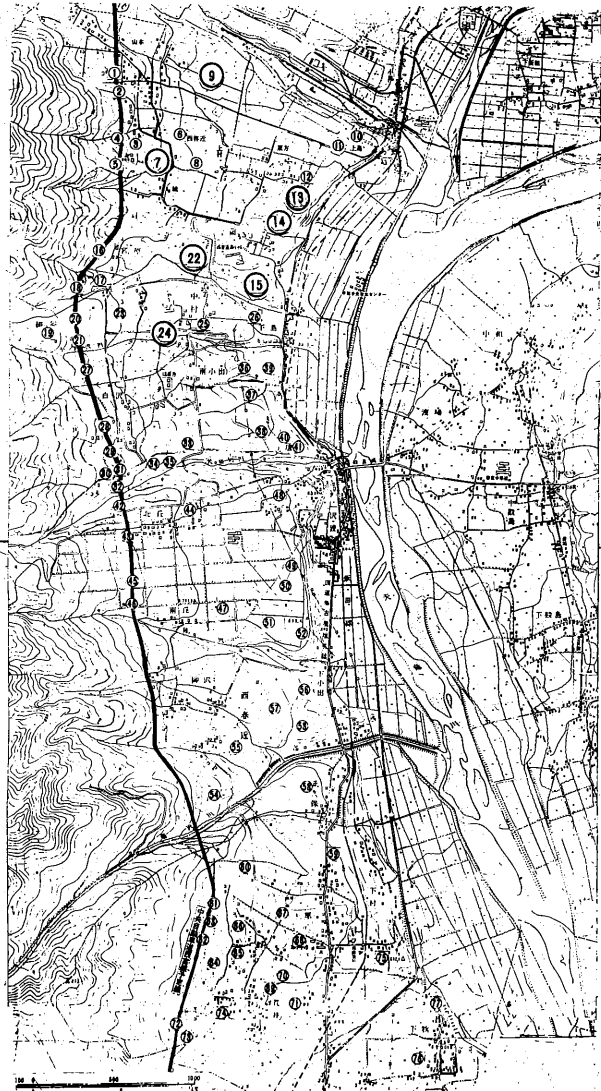
第 I 章 まえがき，小出城（城南）・浜射場遺跡の環境

第 1 節 位 置

小出城（城南）遺跡は長野県伊那市西春近城部落，浜射場遺跡は西春近宮の原部落に所在しています。前者の遺跡は東側に小出城，南側には戸沢川，後者の遺跡は北側に深妙寺，南側は小戸沢川がそれぞれ展開しており，自然環境に恵まれた好適の地と言えよう。

遺跡の名称

- | | | | |
|----|-------|----|---------|
| 1 | 城平上 | 40 | 唐木原 |
| 2 | 城平 | 41 | 唐木古墳 |
| 3 | 常輪寺跡 | 42 | 北丘B |
| 4 | 宮林 | 43 | 北丘A |
| 5 | 山の根 | 44 | 北丘C |
| 6 | 山本 | 45 | 南丘B |
| 7 | 常輪寺下 | 46 | 南丘A |
| 8 | 上村 | 47 | 南丘C |
| 9 | 北条 | 48 | 眼田原 |
| 10 | 上島下 | 49 | 山の神 |
| 11 | 上島 | 50 | 上の塚 |
| 12 | 東方B | 51 | 沢渡南原 |
| 13 | 東方A | 52 | 下小出原 |
| 14 | 村岡北 | 53 | 天伯原 |
| 15 | 村岡南 | 54 | 南村 |
| 16 | 大垣境 | 55 | 東田 |
| 17 | 中原 | 56 | 天伯 |
| 18 | 百駄刈 | 57 | 下小出原 |
| 19 | 西垣外 | 58 | 井の久保 |
| 20 | 細ヶ谷A | 59 | 表木原 |
| 21 | 細ヶ谷B | 60 | 山の下 |
| 22 | 小出城 | 61 | 菖浦沢 |
| 23 | 宮ノ原 | 62 | 富士山下 |
| 24 | 浜射場 | 63 | 富士塚 |
| 25 | 中村 | 64 | 広垣外 1 |
| 26 | 中村東 | 65 | 広垣外 2 |
| 27 | 山寺垣外 | 66 | 鳥井田 |
| 28 | 白沢原 | 67 | 高遠道南附近 |
| 29 | 名廻 | 68 | 西春近城城の腰 |
| 30 | 名廻西古墳 | 69 | 安岡 |
| 31 | 名廻東古墳 | 70 | 城の腰 |
| 32 | 名廻南塚 | 71 | 横吹 |
| 33 | 名廻塚 | 72 | 和手 |
| 34 | 鎮護古墳 | 73 | 上手南 |
| 35 | 鎮護古墳 | 74 | 宮入口 |
| 36 | 鎮護古墳 | 75 | 寺村 |
| 37 | 丸山 | 76 | 下牧 |
| 38 | 南小出南原 | 77 | 下牧塚 |
| 39 | 薬師堂 | | |



第 1 図 位置及び遺跡分布図

第2節 地形・地質

日本の屋根と呼ばれている我が郷土長野県はその南部、いわゆる天竜川流域地方は雄大な山々の連なりが明らかである。

長野県、岐阜県、新潟県の国境に聳えておる山々は槍ヶ岳、穂高岳、白馬岳等で、これらを総称して北アルプスと呼んでいる。さらに南下して長野県の中央部から岐阜県の国境に連なる駒ヶ岳、空木岳、南駒ヶ岳、恵那山等を中央アルプスと呼ぶ、さらに、これに併行に南走し、山梨県、静岡岳にまで及ぶ、東駒ヶ岳、仙丈ヶ岳、農鳥岳、荒川岳、塩見岳、間ノ岳、赤石岳、聖岳等の連峰を南アルプスと呼んでいる。

これらの三つの山脈の内、中央アルプス、南アルプスの中間に展開している天竜川の流域の平坦な地は古くより伊那谷と呼ばれた所であって、現在、行政上の区画として上下伊那の両郡に分割されている。

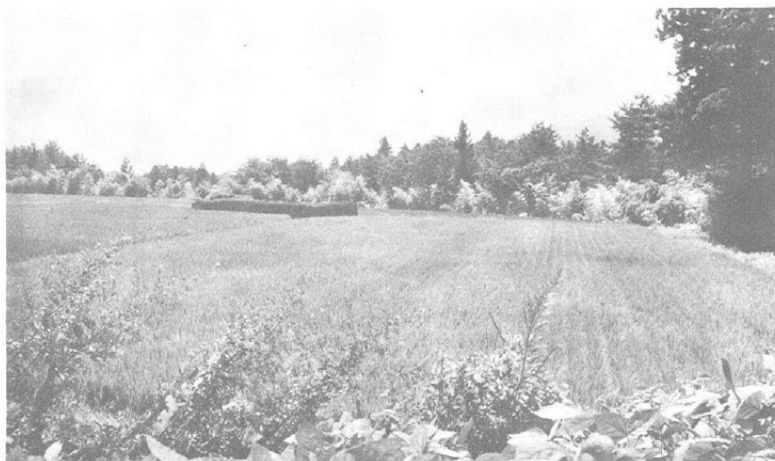
両遺跡（小出城（城南）、浜射場）は伊那市西春近小出地籍に位置している。権現山を象徴とする中央アルプス山地より東へゆるやかな傾斜で展開する扇状地上と前者のは比高30mを越える戸沢川、後者は小戸沢川の段丘上の複合扇状地に存在している。

遺跡地の発掘の際に注目すべき問題が考えられた。それは炉、あるいはカマド、人為的に置れた石は8割までがホルンヘルスであった。地質学で利用される地質図を参考してみるならば、当地区はホルンヘルスの岩脈が走っている唯一の場所とのことであった。したがって、発掘の折に他種の岩石の発見は人為的な運搬を強調すべきである。

第3節 歴史的環境

小出城（城南）遺跡附近は城部落地籍として古くより有名な地であった。部落名の由来より城の存在は明らかであり、それは小出氏の居城と推定される小出城のことである。小出城の初源的な考えとして工藤犬房丸が眼前に浮んでくる。そこで西春近地区の中世の歴史と犬房丸伝説に触れてみよう。

西春近小出地籍は小黒川の南側の段丘上に展開する部落で、昔は小井弓二吉とっていた。この点について詳細なことは諏訪の郷土史家伊藤富雄氏の説明



小出城全景（北側より）

によれば次のようになる。『工藤為綱この人は、小井弓二吉の地頭であって、頼朝とほとんど同時代の人であった。頼朝が正月死ぬとこの人もその6月に死んでいる。その子の能綱が小井出二吉の北郷をついでいる。北郷とは、小黒川から藤沢川井の窪境までで、南郷という言葉は出てこないが現在の諏訪形は小出島諏訪形と書いた古文書があるから、諏訪形中心の地が小井出二吉の南郷にあたり、しかもここ総領地頭たる忠綱の領土となり、本家となっている。北郷の能綱は一分地頭の分家となっている』

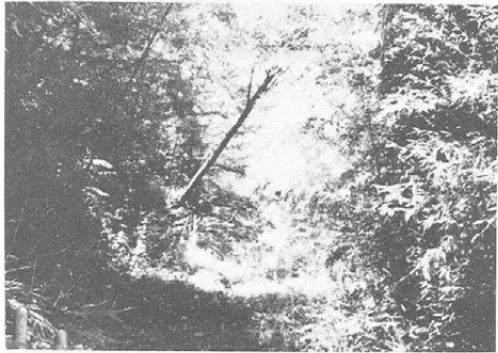
犬房丸伝説の発端となった動機については篠田徳登氏の伊那の古城によると次のように記されている。『建久4年5月、頼朝、諸将をひきいて富士の裾野に巻狩をもよおした。この時五郎時致は兄の十郎祐成と共に猟場にしのび入りこの月の28日の夜、工藤祐経の仮屋に侵入、遂に父の仇をうつ。更に頼朝は祖父祐親の仇である。これにも一太刀に及ばんとて兄弟共に本陣に斬りこんだが、兄は、仁田四郎に討たれ、弟時致は、大あばれにあばれて手に負えぬを、五郎丸という大力無双なるもの女の被服をかぶって油断させ、遂に時致をひとつらまえてしまった。頼朝の前に引きすえられて、訊問されている時、祐経の子犬房丸、たまりかねて五郎時致の面を鉄扇にて打ちすえた。頼朝これを見て、捕えられ縛についた者を打つとは、誠に武士道に反する者だとて大いにいかり、前記の様に信州の地に流した。というのが犬房丸の伝説だ』

浜射場遺跡は字が示すように弓を射った場所と言う考えは確定的であった。場所的にみて小出城と密接的な関係があると思われる。発掘にあたっては、これを裏付けできる遺構が発見されるのではないかと期待をもっていたが、結果的には遺構どころか、中世時代の遺物さえも検出されなかった。次に浜射場遺跡の北側にある深妙寺の由来を伊那市寺院誌によって簡潔に説明を加えてみたいと思う。本寺は正確には感応山深妙寺と称しており、開基は常法院日遊上人と伝えられている。

日遊上人は宗祖日蓮聖人の六老僧の一人といわれた日朗上人の愛弟子であった。上人は宗祖日蓮の法華経帰依の精神を地方に流布伝道する為に、各地を巡って布教に勉めたが、偶々信州伊那の地に行脚説法の折、この寺に立ち寄った。その頃（鎌倉時代後期）この寺は西春近山寺垣外にあり、真言密教を宗旨としていたが当時のことは詳かでない。（山寺垣外はこの寺の所有地で約3町歩余もあり明治初年頃は山林であったが水田の痕跡もあり、老松もあり、塚もあった。現在は果樹園になっている。）日遊はこの寺に足を留めて、法華経の精神、即ち宗祖日蓮の教義を唱道し、日蓮宗を以って自ら開山となった。

その後、慶長年間（1591～1614）に火災に遭い堂塔伽藍すべて烏有に帰したため、現在中村の地に移り再建した。その後2度の火災に遭り現在にいたっている。

（小池政美）



小出城の内堀

凡 例

1. 今回の調査は昨年度実施された西春近地区北条・常輪寺下遺跡緊急発掘調査に続くもので、西春近地区、小出城（城南）・浜射場遺跡報告書とする。
2. この調査は広域営農団地農道整備事業に伴う緊急発掘で、事業は南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は49年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡単にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。
友野良一、 小池政美、 御子柴泰正

○図版作製者

- ・遺構及び地形実測図 友野良一 小池政美

○写真撮影

- ・発掘及び遺構 友野良一 小池政美
- ・遺物 友野良一 小池政美

5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

目 次

序	
凡 例 (4)
目 次 (5)
挿図目次 (6)
図表目次 (6)
図版目次 (6)
第 I 章 発掘調査の経過 (7～9)
第 1 節 発掘調査の経緯 (7)
第 2 節 調査の組織 (7～8)
第 3 節 発掘日誌 (8～9)
第 II 章 遺 構 (10～19)
第 1 節 住居址 (10～11)
第 2 節 竪 穴 (12～19)
第 III 章 遺 物 (20～24)
第 1 節 土 器 (20～22)
第 2 節 石 器 (22～23)
第 IV 章 ま と め (23～24)

挿 図 目 次

第1図	位置及び遺跡分布図…… (1)	第12図	第10号竪穴実測図…… (16)
第2図	遺構配置図…… (10)	第13図	第11号竪穴実測図…… (16)
第3図	第1号住居址実測図…… (11)	第14図	第12号竪穴実測図…… (17)
第4図	第2号住居址実測図…… (12)	第15図	第13号竪穴実測図…… (17)
第5図	第3号住居址実測図…… (12)	第16図	第14・15号竪穴実測図…… (18)
第6図	第1号竪穴実測図…… (13)	第17図	第16号竪穴実測図…… (18)
第7図	第2・3・4号竪穴実測図…… (13)	第18図	第17号竪穴実測図…… (18)
第8図	第5号竪穴実測図…… (14)	第19図	第18号竪穴実測図…… (19)
第9図	第7号竪穴実測図…… (15)	第20図	第19号竪穴実測図…… (19)
第10図	第8号竪穴実測図…… (15)	第21図	第20号竪穴実測図…… (19)
第11図	第9号竪穴実測図…… (16)		

図 表 目 次

第1表	出土土器の形状一覧表 (その1) … (20)	第5表	出土土器の形状一覧表 (その5) … (21)
第2表	出土土器の形状一覧表 (その2) … (20)	第6表	出土土器の形状一覧表 (その6) … (22)
第3表	出土土器の形状一覧表 (その3) … (21)	第7表	出土石器の形状一覧表 (その7) … (22)
第4表	出土土器の形状一覧表 (その4) … (21)	第8表	出土石器の形状一覧表 (その8) … (23)

図 版 目 次

図版1	遺構全景 …… (26)	図版9	出土土器 …… (33)
図版2	遺構配置及び遺構 (住居址) …… (27)	図版10	出土土器 …… (34)
図版3	遺構 (住居址) …… (28)	図版11	出土土器 …… (34)
図版4	遺構 (竪 穴) …… (29)	図版12	出土土器 …… (35)
図版5	遺構 (竪 穴) …… (30)	図版13	出土土器 …… (35)
図版6	遺構 (竪 穴) …… (31)	図版14	出土石器 …… (36)
図版7	遺構 (竪穴) 及び遺物出土状況… (32)	図版15	出土石器 …… (36)
図版8	出土土器 …… (33)		

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

広域営農団地農道整備事業（通称、大規模農道事業）は西春近地区に於いて、本年度作物収穫後、県営畑地帯総合土地改良事業と併行して行なわれることが当初より計画されていました。

西春近地区で大規模農道に関連した北条遺跡、常輪寺下遺跡は昨年発掘調査を実施し、多大な成果を得ることができました。昨年に引続き、本年度は小出城（城南）遺跡と浜射場遺跡の両遺跡が該当しました。ここで取り扱う小出城（城南）遺跡は8月上旬～中旬に行ないました。伊那市教育委員会は南信土地改良事務所より委託を受け、小出城（城南）遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

8月1日、南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

小出城（城南）遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
“	向井 雅重	長野県文化財専門委員
“	木下 衛	上伊那教育会会長
“	原 益久	南信土地改良事務所長
“	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野 孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
“	保坂 九市	“ 課長補佐
“	中村 幸子	“ 主事

発掘調査団

団 長	友野 良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津 清志	長野県考古学会会員
“	御子柴泰正	“
調 査 員	小池 政美	“
“	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
“	清水 満	長野県考古学会会員

調 査 員	福 沢 幸 一	長野県考古学会会員
”	太 田 保	”
”	柴 登己夫	”
”	長 瀬 康明	”
”	本 田 秀明	”
”	堀 口 貞幸	”
”	深 沢 健一	”
”	丸 山 弥生	国学院大学学生
”	赤 羽 義洋	”
”	石 岡 憲雄	”
”	館 野 孝	”

第 3 節 発掘日誌

昭和49年8月1日 遺跡地に発掘器材の運搬をし、発掘準備をする。

昭和49年8月2日 畑として耕作されていたところは荒らしていたとみえて、茅がうっそうと茂っており、上田秋成の浅じが宿を思い出した。草カリとグリット設定を同時に実施する。グリットは一番南の水田をA地区、次に畑をB地区、次の水田をC地区、次の水田をD地区と区別した。それぞれにセンターを中心として東側を10, 9, 8と数字を小さくし、西へは11, 12, 13とする。道路幅がまちまちなので、数字はそのつど変っていた。午後より、グリット掘りを開始する。水田造成の時に土の移動があったとみえて、A地区の北側では20数cmでローム層が現われた。このような状態なので、遺構の検出は不可能と思われた。B地区へグリット掘りを実施する。この畑地は、南傾斜により、南側は土層が深く、ローム層まで約1mを越している。北側へいくにしたがって、徐々に浅くなっている。用地内の東限近くのグリットを2列にわたって北へと延長して10カ所ほど掘り下げる。遺物は相当量の発見をみたが、遺構の検出はなかった。

昭和49年8月3日 昨日に引続きグリット掘りを実施し、西へと延長していくと、BF 10附近に数多くの土器片と相当量の焼土と炭化物がみられ明らかに遺構の存在性を有効なものにしてくれたので、附近のグリットを数カ所拡張してみると、前のように数多くの土器片がみられ、また円形プランの一隅がつかめたので、掘り下げを開始し、一様これを第1号住居址とした。第1号住居址を掘り下げていく段階で、遺物は縄文前期終末期のものが多く、この時期の住居址と考えてよい。これらの遺物に混じって、たった1片ではあるが、茅山式、神の木式の発見は興味深い。



発掘風景

BG 10より復元可能の内耳片が出土し、小出城との関係にある程度実証できる資料を提供してくれた。B地区の傾斜が平坦面にかかるBH 12～BO 12, BH 16～BO 16にかけて、大小の円形やあるいは楕円形の落ち込みがあり、これを南より北にかけて第1号堅穴から第16号堅穴と命名する。

配置関係については遺構配置図を参照してもらいたい。

昭和49年8月4日 第1号住居址の掘り下げ、前日同様相当量の縄文前期の土器片が出土した。床面は砂礫混合の極めて堅緻なローム層の叩きであった。あとで、わかったことであるが、住居址の南側にこれを切るようにして、溝状の落ち込みが東西に走っていた。連日、快晴が続き、乾燥が著しく、すぐにプランが不明となるので、清掃をして、第1号堅穴から第16号堅穴までを掘り始める。主体の掘りを第1号堅穴から第3号堅穴までとする。第1号堅穴の西壁に密着して底部だけの土器が出土した。第2号堅穴、第3号堅穴も相当量遺物が出土し、他の堅穴も期待がもてそうである。

昭和49年8月5日 第1号住居址の完掘を終える。柱穴は4本と思われ、傾斜地構築により、南壁は存在せずに、床面の有無により規模をつかめる。炉は中央部に焼土の堆積がそれであると思われる。第4号堅穴から第16号堅穴の掘り下げを開始する。前日の期待を裏切るかのように遺物は極めて少量であった。第6号堅穴は石が二つあり、なかより焼土と甕が出てきた。おそらく埋甕炉と思われる。したがって、これを住居址と考えて第2号住居址とする。炉面まで、耕作土が20cm位であったために耕作の時に壁は破壊されてしまったようであった。ただし、柱穴が存在すると思い、附近を捜してみると、炉を中心として、6本の支柱穴がみられた。

昭和49年8月6日 第1号住居址の完掘を、並びに清掃を終える。堅穴の密集している周囲を清掃していると、新たに3個の堅穴が見つかり、通し遺構番号によって、第17号堅穴、第18号堅穴、第19号堅穴とする。午前中一杯をもって3つの堅穴の完掘を済ませる。午後よりC地区に移る。C地区は開田の折に土層の変動が顕著であったとみえて、調査可能地域は全体の3分の1程度に過ぎなかった。調査を進めていくと黒土の落ち込んだ第20号堅穴を発見し、それを完掘し終える。さらに調査を進め、D地区のグリットを掘り下げていくと黒土の落ち込みがみられ、第3号住居址とする。

昭和49年8月7日 堅穴の清掃並びに第3号住居址のプラン確認と、完掘を終える。午後は第1号堅穴から第20号堅穴、第1号住居址から第3号住居址の写真撮影をする。

昭和49年8月8日 B地区の堅穴6カ所の平面実測を行なう。

昭和49年8月9日 第1号堅穴から第5号堅穴までの実測を終了する。

昭和49年8月12日 第7号堅穴、第14号堅穴～第15号堅穴の実測、第2号住居址の実測。

昭和49年8月13日 第1号堅穴から第20号堅穴まで、現場にて原稿書きの下調べをする。

昭和49年8月14日 第1号住居址の平面、断面実測、第20号堅穴の平面、断面実測。

昭和49年8月15日 遺物の洗浄や整理を実施する。

昭和49年8月16日 実測の済んでいない遺構の下調べをする。

昭和49年8月17日 第3号住居址の実測、全測図の作製。

昭和49年8月19日 発掘器材の点検と運搬を実施する。

(小池政美)

第Ⅱ章 遺 構

第1節 住 居 址

第1号住居址 (第2図, 図版2)

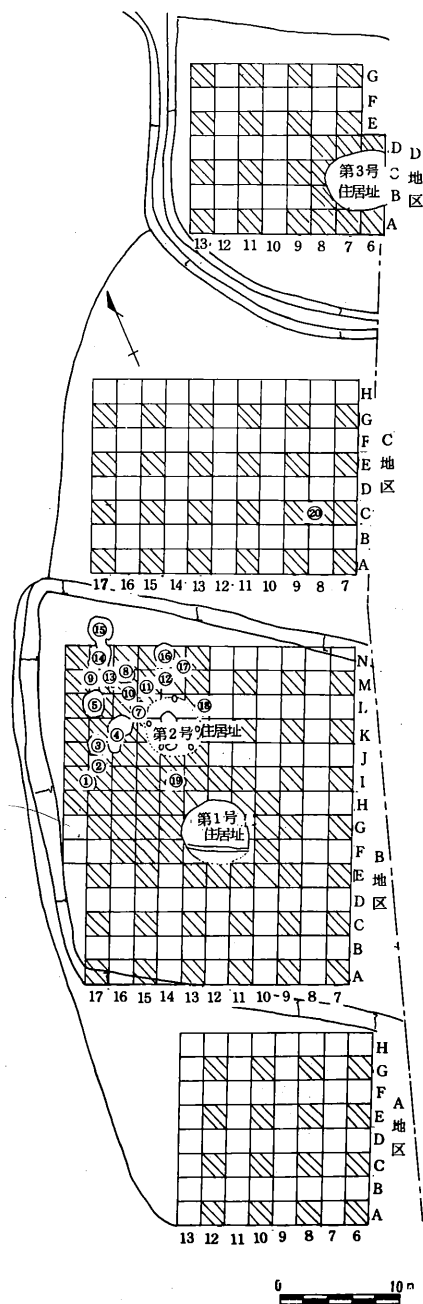
検出された遺構の中で、最も南に位置している。本址は南北5m40cm、東西5m40cm程の円形プランの竪穴住居址である。壁高は深いところで50cm、浅いところでは10数cmであり、南側は後世の溝状のものと思われ、壁は存在しなかった。状態は大体に垂直であり、北壁から西壁にわたって、壁面に細礫が露出しており、その存在レベルは高い方は半分位あり、低い方は若干ハードローム層の組成部を含んでいた。

床面は南側に後世の遺構と思われる溝が東西に走り、南と北に寸断された形をとっていた。多少の凹凸はあるが、全般的には水平であった。床としては普通であり、硬度は同心円状に中央部直径2m位は極めて堅緻であり、それらの外周は軟弱気味であった。このことは構築時は外周と同じ硬さであったが中央部は炉の位置と関係があり、したがって日常生活の舞台の中心となり、人為的に踏みかためられてかたくなったと思われる。

炉址は住居址の中央部近くにあり、大きさは南北30cm、東西45cm、深さ15cm程を数える。底部は断面すりばち状を呈していた。内部の焼土や木炭の状態は凹み状の周辺や、壁面には堆積が厚く、底部のそれは割合に薄かった。遺物は大部分縄文前期終末期の土器片が出土した。

第2号住居址 (第4図, 図版3)

各種の竪穴群の中に、はさまれた形で検出された遺構である。本址は表土面より40cm位下った砂礫混りの褐色土層面に構築された住居址であり、したがって、掘り込み面は黒色土層と思われるが、耕作の



第2図 遺構配置図

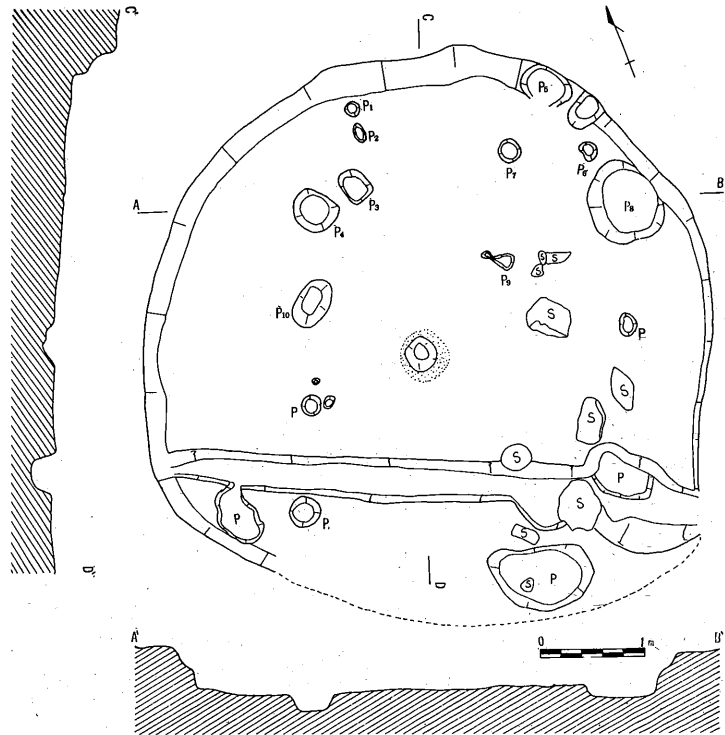
際に破壊されたとみえて現存はしていなかった。構築時は当然堅穴住居址と思われたが、壁は全周にわたって破壊されてしまったので規模並びに壁高、その状態等の諸様相は全くわからなかったが、プランは円形状のものと思われる。

床面は砂礫混合の褐色土層面につくられており、わずかな叩きが認められ、多少の起伏もあった。

炉は南北1 m 70cm、東西1 m 25cm程の長円形状プランを呈し、東

側には二個のホルンヘルスの自然石が存在していた。その他の炉縁石は抜きとられたとみえて、その跡が明瞭にわかった。炉底には埋甕があり、甕の周辺には焼土が赤々と円形状に堆積していた。

主柱穴は6本確認され、径は30~50cm、深さは30~50cm位であった。遺物は加曾利E式が主を占めていた。



第3図 第1号住居址実測図

第3号住居址 (第5図, 図版3)

水田耕作の表土面より約50cm程下ったローム層面を掘り込んだ堅穴住居址である。プランは東側は用地外、南側は破壊等の条件により、全体はわからずに終了してしまったが、推定、プランは円形、規模は直径4 m 50cmから5 m前後と思われる。

壁高は全ての所で10cmに満たなかった。よって状態は低いために不良の類に含まれると思われる細部に着目してみると内傾気味で、凹凸が顕著であった。

床面はローム層自体に設けられていたが、叩きは全面積の10分1程度であり、小さなブロック状の凹凸が各所に存在していた。

炉らしき箇所は見当らなかったが、各所に焼土や木炭が多量に検出された。柱穴の配列も明確なるものは見当が把握できなかった。遺物は北側に勝坂期の新しい土器片が、床面より10cm位浮いてつぶれた状態で出土した。一般的に考えられている勝坂期の住居址としては不十分な点ばかりであった一応、今回は住居址としてとらえておこう。

(小池政美)

第2節 竪穴

第1号竪穴 (第6図, 図版4)

この竪穴はB地区の傾斜面から平坦面にかかる先端部に、しかも、竪穴群の中で最南部に位置している。

表土面より20cm位下った砂礫混合の黄褐色土層より切り込み、南北1m.75cm, 東西1m.20cm程の規模で、長円形状のプランを呈している。深さは50~60cm程で、断面円筒形を示している。

壁の状態は全般的には垂直気味であったが、詳細に注意してみると壁面上部は垂直気味、下部は内傾気味である

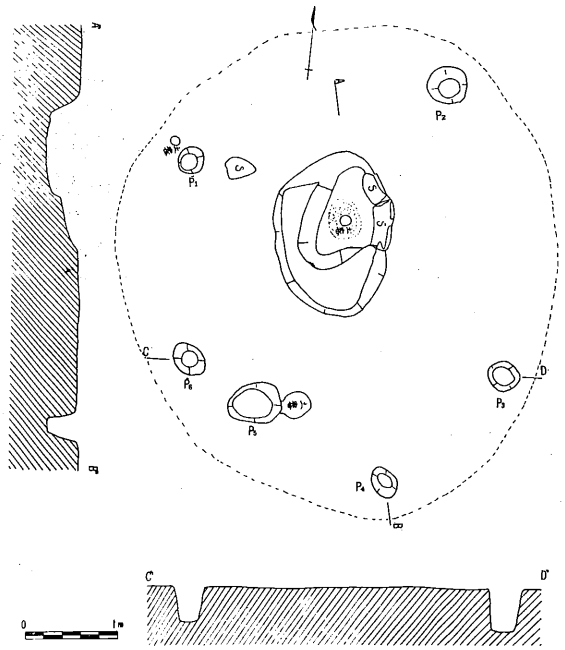
床面は叩き状の人為的な工作はなく自然のまま、軟弱であった。覆土中より多量の炭化物と焼土が検出された

遺物は南西の隅に近い場所と、西壁に近い所にホルンヘルスの自然石を境にして、底部の半完型品に類似する土器が正位の状態で出土した。ホルンヘルスは内部に向かって傾斜しており、大きさは拳大程であった。遺物は縄文前期後葉、縄文中期後葉が出土した。

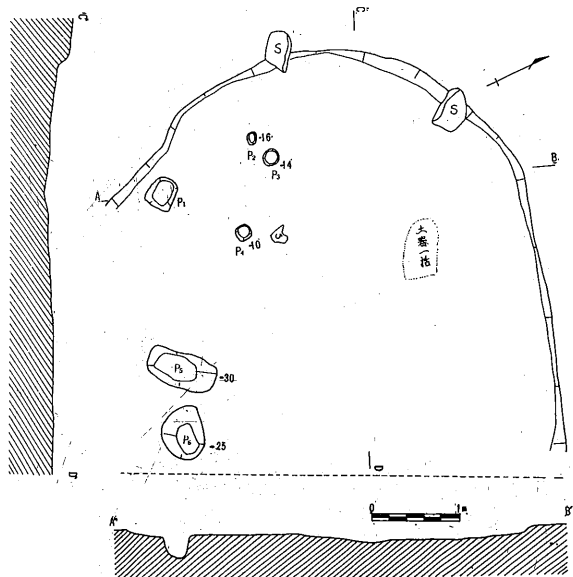
第2号竪穴 (第7図, 図版4)

この竪穴は北側は第3号竪穴と隣接南側は第1号竪穴とはさまれた位置に検出された。砂礫混合の黄褐色土層を掘り込み、南北1m.30cm, 東西1m.30cm程の規模をもち、円形プランを呈し、深さ25~40cmの盆状を呈している

壁面の状態は上部は垂直に、下部は内傾気味であった。また南西のコーナーには壁面全体にわたって5mm~50mmにわたる礫が存在し、一見するに砂礫



第4図 第2号住居址実測図

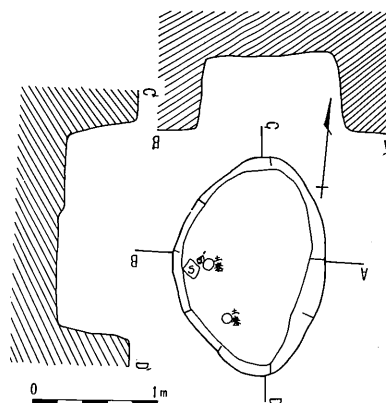


第5図 第3号住居址実測図

層を思わせるような状態であった。

床面には叩きは認められず、大体水平であったが礫がゴツゴツと露出していた。北壁の近くにみられた石はホルンヘルスの自然石で、南北25cm、東西40cm、厚さ10cm程で、底面より30cm位浮いた状態でみられた。これは検出された状態より本堅穴と直接関係がないと思われる。

覆土中より多量の焼土と炭化物がみられた。遺物は縄文早期末葉、縄文前期後葉、縄文中期後葉（御子柴泰正）



第6図 第1号堅穴実測図

第3号堅穴（第7図、図版4）

この遺構は第2号堅穴の北に隣接して構築されている。

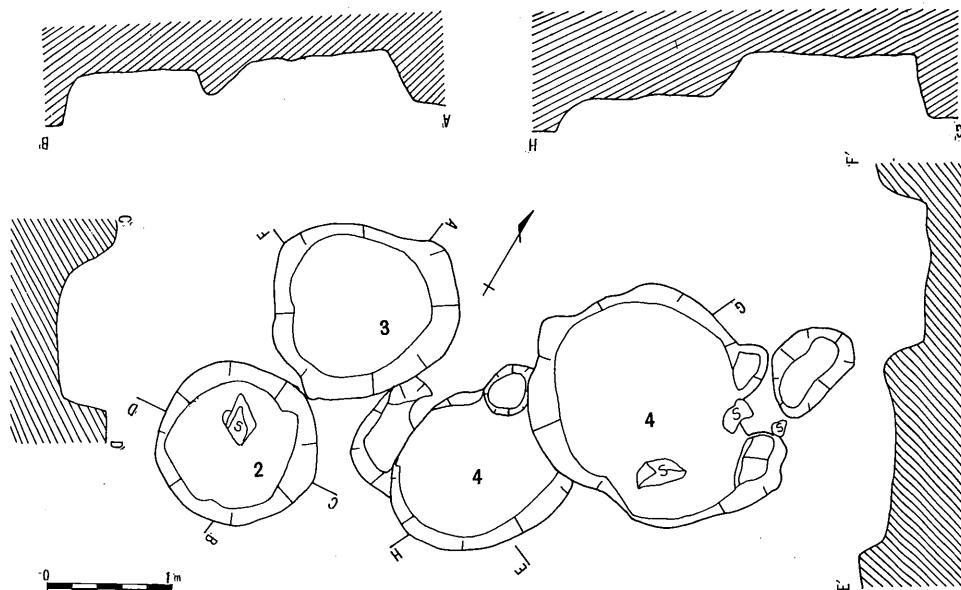
プランは円形、規模は南北1m60cm、東西1m50cm、深さは40~50cm程あり、埋没土は黒色土が充滿していた。

壁の状態は内傾気味を呈し、壁面上半部は砂礫層、下半部はローム層になっていた。床面はローム層よりなり、水平で、わずかな叩きになっていた。覆土中より木炭が多量に出土した。

遺物は縄文早期後葉、縄文前期後葉、縄文中期後葉

第4号堅穴（第7図、図版4）

この遺構は黄褐色土層面を切り込み、南側は第2号、第3号堅穴、北側は第7号堅穴と近接している。本堅穴は他のものと異って2つの堅穴から成り立っているが、今回レベル差によって上段の



第7図 第2号、3号、4号堅穴実測図

ものと、下段のものに区別して説明していこうと思う。まず最初は上段の場合について考えていく。規模は南北1 m 30cm, 東西1 m 25cm, 深さは20~30cm位ある。壁の状態は南, 東側は内傾気味西壁は垂直を呈し, 壁面は細礫で占領されていた。尚北壁は下段のと接しており, 存在はしなかった。

床面は中央部がわずかに低い, 全般的に水平と考えてよかろう。また底面に密着してホルンヘルスの微礫が存在していた。覆土中より炭化物と焼土の検出がみられた。

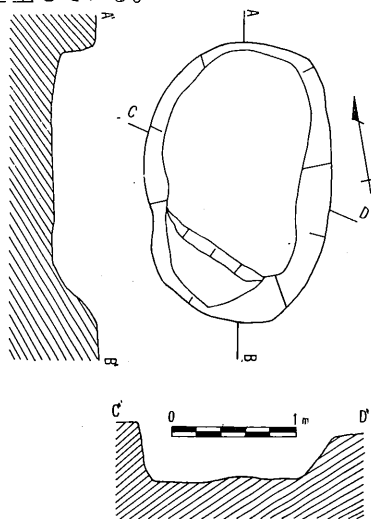
下段の場合について記してみよう。規模は南北1 m 95cm, 東西2 m, 深さは40~50cm位ある。壁の状態は南側は上段のと接しており, 内側への傾斜は著しい。西, 北, 東壁は垂直であり, 壁面の下半部はハードローム層に掘り込まれている。

床面はブロック状の凹凸があり, 細礫がみられた。覆土中より焼土や炭化物の検出がしばしばであった。遺物は縄文前期前葉, 縄文前期後葉, 縄文中期後葉の土器片が出土した。(小池政美)

第5号竪穴 (第8図, 図版4)

この遺構は第9号竪穴の南側に所在し, 黄褐色土層を切り込んだ竪穴である。規模は南北2 m 25cm, 東西1 m 50cm程で, 深さは30~40cmの長円形状プランを呈している。

壁の状態は内傾気味であった。西, 北, 東壁の北半分は普通傾斜, 南壁から東壁の南半分は急傾斜である。南壁にはこぶ状の凹凸があった。床面は全般的に水平であった。南壁に接して段があり, 北壁と段の上にはこぶ状のとび出しがところどころにみとめられた。覆土中に炭化物が検出された。遺物は何も出土しなかった。



第8図 第5号竪穴実測図

第6号竪穴 (第4図, 図版3)

黄褐色土層面に黒色土の明瞭なる落ち込みがあったので一応, 第6号竪穴と命名し, 掘り下げていったが, 途中で石が発見されたり, 底部より焼土の堆積があり, 炉と判明した。したがって第6号竪穴は消滅するようなことになったが, 通し番号の整理上, ここにとりあげておく。遺物については第2号住居址を参照のこと。(御子柴泰正)

第7号竪穴 (第9図, 図版4)

第2号住居址の北西部に隣接して黄褐色土層面を切り込んだ南北1 m 10cm, 東西1 m 45cm, 深さ60~70cmの円形状の竪穴である。壁の状態は幾分断面袋状である。南壁にはところどころに円形状の凹みが認められた。北壁の西半分から西壁にかけて切り込み面より壁面へ20cm位の幅で, ホルンヘルスの細礫が露出していた。床面はわずかな叩きであり, 水平であった。

遺物は縄文前期前半, 縄文前期後葉の土器片が出土した。(友野良一)

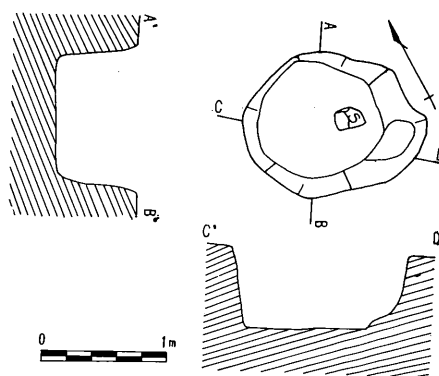
第8号竖穴 (第10図, 図版5)

本遺構の南側では第10号竖穴, 第11号竖穴, 西側は第13号竖穴に隣接して検出された竖穴である。南北1 m 65 cm, 東西1 m 45 cm程の規模を有し, 深さ50~60 cm程の円形を呈している。

壁は下部へいくほど放物線を描くように内傾している。状態はホルンヘルスの自然石(しかも細礫が壁面全体にわたって含まれている。)したがって, このような状態なので, 小さな凹凸が無数にある。

床面はわずかな叩き状になっており, 全般的に水平であった。覆土中に焼土や炭化物が検出された。

遺物は何も出土しなかった。



第9図 第7号竖穴実測図

第9号竖穴 (第11図, 図版5)

本遺構の南側は第5号竖穴, 北側は第14号竖穴にはさまれた形で発見された竖穴である。南北1 m, 東西1 m程の規模で, 円形プランを呈しており, 深さは45~60 cmである。

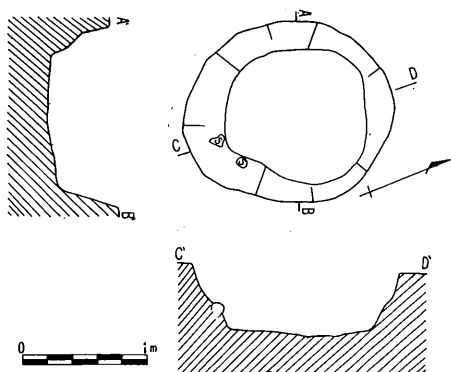
壁の状態は壁面中央部まで垂直, 下半部から底面までは急傾斜であった。床面はわずかな叩きになっており, ほぼ水平であった。西壁は中央部北より, 北壁の中央部にかけて段を有している。

遺物は縄文前期前葉, 縄文前期後葉, 縄文中期後葉の土器片が出土した。

第10号竖穴 (第12図, 図版5)

この遺構の南側は第7号竖穴, 東側は第11号竖穴, 北側は第8号竖穴の三方にはさまれた位置に所在し, 表土面より20 cm位下った黄褐色土層面を掘り込んだ竖穴である。

プランは南北1 m 20 cm, 東西1 m 35 cm程の規模で, 深さ20 cm程の不整円形を呈している。壁面はわずかに内傾気味であり, 南西のそれには多くの細礫を含むと同時に多少の凹凸が認められた。



第10図 第8号竖穴実測図

床面はわずかな叩きになっており, 凹凸も認められた。覆土中に多量の炭化物が検出された。

遺物は何も出土しなかった。(友野良一)

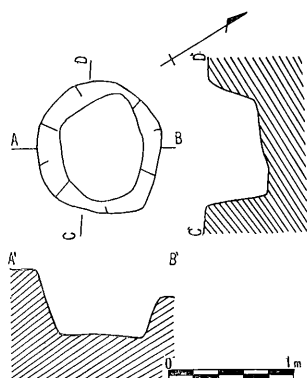
第11号竖穴 (第13図, 図版5)

この遺構は南側は第7号竖穴, 西側は第10号竖穴, 東側は第2号竖穴の三方にはさまれた状態で発見された竖穴である。切り込み面は表土層より20 cm位下った黄褐色土層である。

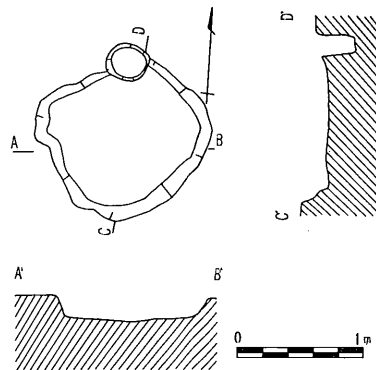
規模は南北1 m, 東西1 m 5 cm程を有し, 壁高は南, 西30 cm, 北25 cm, 東23 cm程で竖穴の中では浅い

方に属している。

壁は垂直に近く、壁面全周にわたって微礫から拳大程のホルンヘルスの自然石が充満していた。南壁の中央部から北にかけて、南北45cm、東西31cm、深さ20cm程の方形の凹みがあり、何を意味して



第11図 第9号竪穴実測図



第12図 第10号竪穴実測図

いるかは不明である。床面はわずかな叩きがあり、多少の凹凸が認められた。覆土中に木炭が検出された。遺物は何も出土しなかった。

第12号竪穴 (第14図, 図版5)

本竪穴は表土面より20cm程下った黄褐色土層面を掘り込み、西側は第11号竪穴、東側は第16号竪穴、北側は第17号竪穴に近接している。規模は南北1m5cm、東西1m10cm程で円形プランを呈している。深さは60~75cm程を測定でき、今回、発掘された竪穴としては深い方に属している。

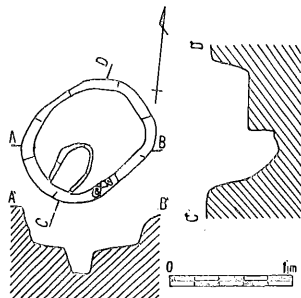
壁は垂直に近く、状態は西壁中央から北壁、東壁中央部にかけて、切り込み面より30cm位の深さで、細礫が含まれている。壁面の底面に近いところの土層は微量の砂を含んでいる。

床面はわずかな叩きがあり、南東の一角が数cm高く、北へ行くほど多少の傾斜をしている。覆土中に木炭と焼土を検出した。遺物は何も出土しなかった。

第13号竪穴 (第15図, 図版5)

表土面より20cm位下った黄褐色土層面を掘り込み、構築された竪穴である。本竪穴の存在位置は西側は第9号竪穴、東側は第8号竪穴、北側は第13号竪穴に囲まれている。プランは円形で、規模は南北95cm、東西90cm、深さは10~17cm程を測定できる。壁の状態は内傾気味で、多少の凹凸がある。床面はわずかな叩きで、北へと少し傾斜し、ところどころにブロック状の凹凸が認められる。

遺物は何も出土しなかった。



第13図 第11号竪穴実測図

第14号竪穴 (第16図, 図版6)

畑作表土層面より20cm位下った黄褐色土層面を掘り込んで構築された竪穴であって、その位置は北側は第15号竪穴、東側は第13号竪穴、南側は第9号竪穴にはさまれた状態であった。

平面プランはひょうたん形を呈し、規模は南北2m、東西1m75cm、壁高は南50cm、西55cm、北20cm、東45cm程を測定可能である。壁の状態は西側は垂直、南側から東側、北側は内弯気味であ

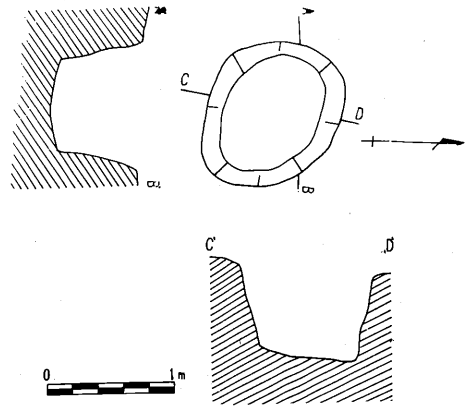
り、わずかな凹凸がみとめられた。北壁は第15号堅穴と接している。南壁の中央部と西壁の北半分の段を有する部分にフラットな面が存在し、凹凸が著しい。床面は凹凸がはなはだしく、叩きは存在しなかった。遺物は何も出土しなかった。

第15号堅穴 (第16図, 図版6)

表土面より20cm位下った黄褐色土層面を掘り込んで構築された堅穴で、南側は第14号堅穴と接している。平面プランは不整形円形を呈し、その規模は南北2m10cm, 東西2m程, 壁高は南30cm, 西40cm, 北東は50cmを測定できる。

壁の状態は内傾が著しい。北壁の西半分から、西壁, 南壁にかけて、微礫を含んでいる。第14号堅穴に接しているところには壁が存在しなかった。

床面には段があり、レベル差によって上段と下段とに区別する。上段のは多少の凹凸があり、下段のはほぼ水平であった。上段, 下段ともに叩きはなかった。覆土中に木炭と焼土を検出した。遺物は何も出土しなかった。



第14図 第12号堅穴実測図

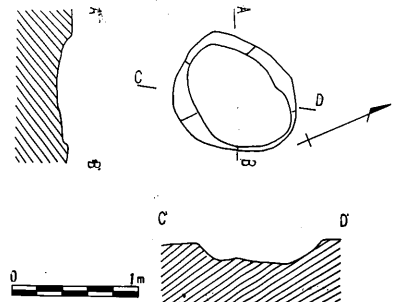
第16号堅穴 (第17図, 図版6)

この遺構は南側に第12号堅穴, 第17号堅穴と隣接し築構され、切り合い関係はなくて、単独に発見された。プランは円形を呈し、規模は南北1m85cm, 東西1m90cm程, 壁の深さは50cm前後を計測できる。

壁の状態は垂直に近く、壁面全部にわたって微礫から拳大程の礫を露出している。

床面はわずかな叩きがあり、だいたい水平を呈している状態は壁面よりも幾分大きめの石がくいこんでいた。覆土中に微量ではあるが木炭を検出した。

遺物は何も出土しなかった。



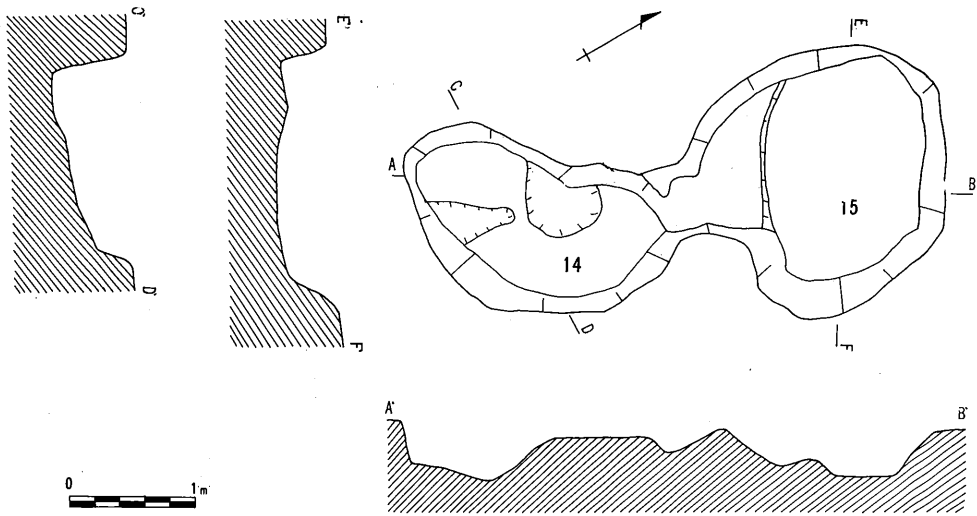
第15図 第13号堅穴実測図

第17号堅穴 (第18図, 図版6)

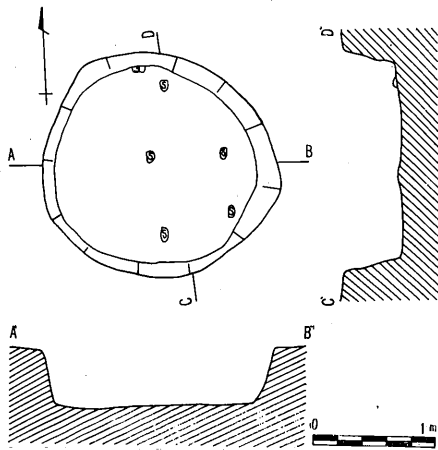
この堅穴は砂礫混りの黄褐色土層を掘り込み、西側は第12号堅穴, 北側は第16号堅穴に近接して検出された。プランは円形, 規模は南北1m15cm, 東西1m30cm程, 深さは30cm程を測定できる。

壁の状態は垂直に近く、壁面は大小さまざまな礫で表面が覆われている。礫の状態は切り込み面に近い方が小さく、底面に近づくにしがって大きくなっているようだ。床面はわずかな叩きになっており、拳大程のホルンヘルスが数個で一集団をつくり、それが数カ所点在していた。

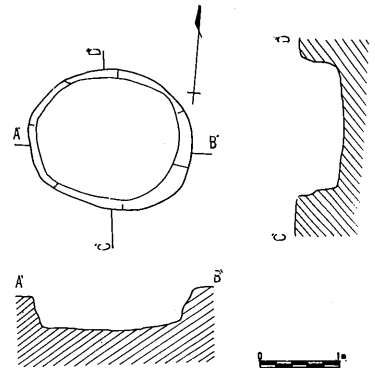
遺物は縄文前期後葉の土器片が出土した。



第16図 第14号・15号竪穴実測図



第17図 第16号竪穴実測図



第18図 第17号竪穴実測図

第18号竪穴 (第19図, 図版6)

この遺構は第2号住居址の北西の隅に接するような姿で発見された竪穴である。切り込み面は砂礫混合の黄色土層であった。

平面プランは長円形状を呈し、その規模は南北1 m 60cm, 東西1 m 30cm程を測定できる。壁高は南, 東, 北は55cm, 西は63cmを計えられた。壁の状態は垂直に近く、礫が壁面の上部を覆い、下部は砂質混合土層であった。床面にはわずかな叩きや礫が存在していた。

遺物は縄文前期後葉の土器片が出土した。

(小池政美)

第19号竖穴 (第20図, 図版6)

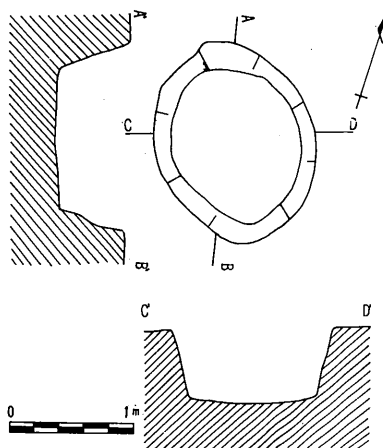
この遺構は砂礫混合の黄褐色土層を掘り込み、竖穴としては最南部、第1号住居址の近くに検出された。

プランはレベル差によって、南側の方形を上段とし、北側の長円形を下段として説明していこう。

上段の規模は南北40cm, 東西1m, 深さは10cm程, 下段のそれは南北90cm, 東西1m45cm, 深さは50cm前後を測定できる。上段の壁は垂直に近く、礫を含んでいる。床面には叩きはなくて、凹凸がある。

下段の壁は内傾が強く、礫を含んでいる。床面には叩きは存在しなかった。覆土中より木炭を検出した。

遺物は何も出土しなかった。



第19図 第18号竖穴実測図

第20号竖穴 (第21図, 図版7)

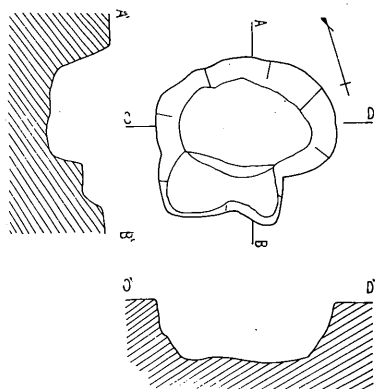
この遺構はC地区に発見された唯一の竖穴であって、表土面より50cm位下ったローム層面を掘り込んで構築されていた。東側の長方形のものは後世の攪乱によるものと考えられ、直接的には本竖穴とは関係がないと思われる。

プランは円形で、規模は南北1m5cm, 東西1m5cm程, 深さは25cm位であった。壁の状態は凹凸が著しく、特に東壁は切り込み面からして凹凸が著しい。

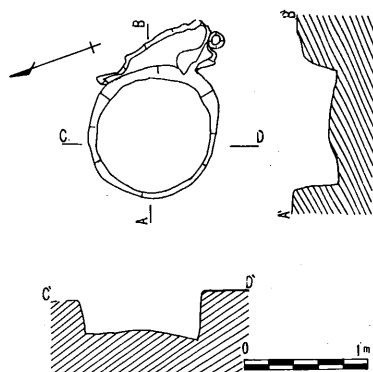
断面は床面へ行くにしたがってひろがっており、全般的に断面袋状を呈していた。床面はローム層の叩きがあり、壁面に沿って約20cm位の幅で低くなっている。中央部は10cm位高くなっており、それが叩きになっている。覆土中に少量の木炭が検出された。

遺物は何も出土しなかった。

(小池政美)



第20図 第19号竖穴実測図



第21図 第20号竖穴実測図

第Ⅲ章 遺 物

第1節 土 器

土器の説明は表を作成し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主観によるものである。
(小池政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
8	1	多量の長石	良好	白茶褐色	8	沈線, ボタン状貼付	第1号住居址
"	2	"	普通	黒褐色	7	縄 文	"
"	3	少量の長石	"	赤褐色	6	"	"
"	4	多量の雲母	良好	茶褐色	9	"	"
"	5	多量の長石	普通	"	8	"	"
"	6	少量の長石	"	黒褐色	9	沈 線	"
"	7	多量の長石	"	"	7	"	"
"	8	多量の雲母	"	"	8	縄文, 沈線	"
"	9	"	"	茶褐色	7	隆帯, 爪形文	"
"	10	"	"	黒褐色	7	沈線, 爪形文	"
"	11	微量の雲母	"	"	6	沈線, 縄文	"
"	12	多量の雲母	良好	"	7	"	"
"	13	"	"	茶褐色	9	隆帯縄文沈線爪形文	"
"	14	多量の長石	"	"	7	縄文, 粘土紐	"

第1表 出土土器の形状一覧表 (その1)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
9	1	少量の雲母	普通	茶褐色	7	縄文, 懸垂文	第2号住居址
"	2	少量の長石	"	黒褐色	7	縄 文	"
"	3	多量の雲母	良好	"	8	隆帯, 沈線文	"
"	4	"	"	茶褐色	7	縄文, 懸垂文	"
"	5	少量の長石	"	"	5	縄文, 沈線	"
"	6	多量の雲母	普通	黒褐色	6	隆帯, 沈線	第3号住居址
"	7	多量の長石	良好	白茶褐色	6	沈 線	"
"	8	多量の雲母	普通	黒褐色	6	縄文, 沈線	"
"	9	"	"	白茶褐色	6	隆帯, 沈線	"
"	10	少量の雲母	"	黒褐色	7	爪 形 文	"
"	11	"	"	"	6	"	"
"	12	少量の長石	"	茶褐色	11	縄文, 沈線, 爪形文	"
"	13	"	"	黒褐色	8	沈線, 刻目	"
"	14	多量の雲母	"	茶褐色	8	縄文, 爪形文, 沈線	"
"	15	"	"	"	11	爪 形 文	"

第2表 出土土器の形状一覧表 (その2)

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
10	1	少量の長石	普通	黒褐色	6	縄文	第1号竪穴
"	2	多量の雲母	"	"	5	"	"
"	3	少量の長石	良好	茶褐色	12	隆帯, 刺突文	"
"	4	多量の繊維	普通	白灰色	6	条痕文	第2号竪穴
"	5	多量の雲母	"	黒褐色	6	無文	"
"	6	少量の長石	"	"	6	縄文	"
"	7	多量の雲母	"	茶褐色	6	"	"
"	8	少量の長石	"	黒褐色	6	"	"
"	9	多量の長石	"	茶褐色	7	"	"
"	10	多量の雲母	"	赤褐色	10	沈線, 懸垂文	"
"	11	多量の繊維	"	"	8	条痕文	第3号竪穴
"	12	多量の雲母	"	黒褐色	6	刺突文, 縄文	"
"	13	"	"	"	5	縄文	"
"	14	"	"	茶褐色	8	沈線	"
"	15	多量の長石	良好	"	12	"	"
"	16	"	"	"	10	"	"

第3表 出土土器の形状一覧表(その3)

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
11	1	多量の長石	普通	黒褐色	8	縄文	第4号竪穴
"	2	"	"	"	6	"	"
"	3	少量の長石	"	"	6	"	"
"	4	"	"	赤褐色	8	沈線, 粘土紐	"
"	5	多量の雲母	"	"	8	沈線, 粘土紐	"
"	6	少量の雲母	良好	白茶褐色	6	縄文	第6号竪穴
"	7	"	普通	黒褐色	10	沈線	"
"	8	"	"	茶褐色	7	縄文	第7号竪穴
"	9	"	良好	白茶褐色	6	沈線, 刺突文	"
"	10	多量の雲母	普通	茶褐色	11	沈線	"
"	11	少量の長石	良好	"	7	刺突文	第9号竪穴
"	12	"	普通	"	7	縄文	"
"	13	多量の雲母	"	黒褐色	7	"	"
"	14	多量の長石	"	茶褐色	5	"	"
"	15	少量の雲母	"	赤褐色	10	沈線, 刺突文	"
"	16	"	良好	白茶褐色	6	縄文, 沈線	"

第4表 出土土器の形状一覧表(その4)

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
12	1	少量の長石	普通	白褐色	5	縄文	第17号竪穴
"	2	"	"	"	6	"	"
"	3	"	不良	黒褐色	10	"	"
"	4	"	"	"	8	沈線	"
"	5	多量の雲母	"	白灰色	6	縄文	第18号竪穴
"	6	多量の長石	普通	"	5	無文	"
"	7	"	良好	黒褐色	7	内耳土器片	"
"	8	"	"	"	8	"	"
"	9	"	"	"	7	"	"
"	10	"	"	"	6	"	"
"	11	"	"	"	"	"	"
"	12	"	"	"	7	"	"

第5表 出土土器の形状一覧表(その5)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
13	1	多量の繊維	普 通	黒 褐 色	7	刺 突 文	グリット
"	2	"	"	"	10	"	"
"	3	"	"	茶 褐 色	11	条 痕 文	"
"	4	少量の長石	"	白灰褐色	7	刺 突 文	"
"	5	"	"	"	"	"	"
"	6	"	"	黒 褐 色	"	刺突文, 縄文	"
"	7	多量の長石	"	茶 褐 色	10	縄 文	"
"	8	"	"	黒 褐 色	8	"	"
"	9	多量の雲母	"	"	5	"	"
"	10	多量の長石	"	白灰褐色	7	"	"
"	11	多量の雲母	"	"	6	"	"
"	12	少量の長石	良 好	"	8	粘土紐, 刻目	"
"	13	"	"	"	"	"	"
"	14	"	普 通	黒 褐 色	6	"	"
"	15	多量の雲母	良 好	"	7	縄文, 粘土紐, 沈線	"
"	16	"	普 通	茶 褐 色	8	縄文, 爪形文, 沈線	"
"	17	"	"	黒 褐 色	7	縄文, 沈線	"
"	18	"	"	"	7	"	"

第6表 出土土器の形状一覧表(その6)

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版, 番号, 名称, 器形, 石質, 備考である。

(小池政美)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
14	1	打製石斧	短冊形	緑泥岩	第3号住居址
"	2	"	乳棒状	"	第1号住居址
"	3	棒状石器		"	"
"	4	磨製石斧	定角形	"	"
"	5	磨 石		硬砂岩	第2号住居址
"	6	"		緑泥岩	"
"	7	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第1号住居址
"	8	"	"	緑泥岩	第3号住居址
"	9	"	"	"	"
"	10	"	"	"	"

第7表 出土石器の形状一覧表(その7)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
15	1	磨 石		硬砂岩	第 4 号 堅 穴
"	2	"		"	"
	3	打 製 石 斧	短 冊 形	緑 泥 岩	第 19 号 堅 穴
	4	"	撥 形	硬 砂 岩	グ リ ッ ト
	5	"	"	"	"
	6	砥 石		油 性 頁 岩	"
	7	打 製 石 鏃	有 茎 鏃	黒 耀 石	第 1 号 堅 穴
	8	"	三 角 鏃	"	第 2 号 堅 穴
	9	"	"	"	第 2 号 堅 穴
	10	石 匙	縦 形	白 質 頁 岩	第 2 号 堅 穴
	11	"	"	"	第 3 号 堅 穴
	12	スクレーパー		"	グ リ ッ ト
	13	打 製 石 匙	横 型	硬 砂 岩	"

第 8 表 出土石器の形状一覧表 (その 8)

第 IV 章 ま と め

小出城(城南)遺跡の発掘地区はかの遠く、北条鎌倉時代に盛隆した小出氏の居城、小出城の外部城郭遺構の一部に位置し、先端部は戸沢川が流れ、その段丘は高く、狭く、かつまた急傾斜であって、比高は30数mを測定できる。現存する我々が考えてみても、よくも自然の要害を利用したものだと言嘆するものであった。小出城の本城と称されている地点は発掘地点より東へ500m離れたところにあり、現在は畑地に利用されている。本城の南側には幅2m、高さ1m位の土塁が、また、それを取り囲むようにして西側に内堀が残存している。前書はこのくらいにしておこう。このような歴史的背景があるために当初より中世時代の遺構が発見されるのではないかと期待に胸をふくらませて発掘調査に着手した。ところが成果は期待を全く裏切って堅穴住居址3、堅穴20であった。わずかに中世の遺構と思われるのは第1号住居址の南東に多くの内耳土器片が出土した。これだけの出土はおそらく壘かむり葬法が行なわれたのであろう。

第1号住居址は円形プランの堅穴住居址であり、その規模は南北5m40cm、東西5m40cm位であった。その時期は縄文前期終末期、編年というならば諸磯C式、下島直後形式であった。

第2号住居址は切り込み面が浅く、壁は全く残存していなかった。プランは円形と思われるが、規模は不明であった。炉は石囲炉の形態を呈し、大きさは南北1m70cm、東西1m25cm程を測定でき、これだけの規模は炉として全盛期のものであろう。よって炉より時期的には加曾利E II式頃に位置づけられると思われる。

第3号住居址は水田の下に構築された位置にあり、水田造成の折に破壊されたとみえて住居址に適合する唯一の条件としてはわずかに床面がたたかれていたことだけであった。本址の時期は勝坂期の新しいところであった。

竪穴遺構は第1号から第20号まであり、これらは170㎡位の範囲内に全て含まれている。ただし第6号は最終的には第2号住居址の炉となってしまう、欠番とする。これらの竪穴は墓拡あるいは縄文早期土器片が出土している住居址的な遺構、あるいは勝坂的なものかは現段階では結論的なものではなかった。次に竪穴遺構を形態から分類すると次のようになる。

竪穴をプランごとに分類すると長円形状のものは第1号、第15号、第18号である。円形状のものは第2号、第3号、第4号、第7号、第8号、第9号、第12号、第13号、第17号、第20号である。

不整円形は第10号、第11号、第14号、第15号、第16号、第19号である。

規模については長円形状の場合には長軸に、円形の場合には平均直径で考えてみることにする。

長軸の方では1m50cmから2mは第1号、第18号、2m以上は第5号竪穴である。円形直径の場合には50cmから1mは第13号、1mから1m50cmまでは第2号、第4号、第7号、第9号、第12号、第17号、第20号竪穴である。1m50cmから2mまでは第3号、第8号、第16号竪穴である。

特殊な場合としては段を有するもの14号、15号、19号竪穴、2つの穴が密着しているので1つの竪穴と考えた場合のものは第4号竪穴、石が入っているもの（この場合はレベル差があっても、それは無視して考えるとする）第1号、第2号、第4号、第7号竪穴である。

遺物は縄文早期末葉、縄文前期前葉、縄文前期後葉、縄文中期後葉等多種多様であり、同じ竪穴内より各種の土器が出土し、時代決定にはきわめてその慎重性を必要とする。

（小池 政美）

参 考 文 献

- | | | |
|-----------------|-------|----------------------|
| 1. 伊那の古城 | 篠田徳登著 | 伊那毎日新聞社 |
| 2. 伊那市寺院誌 | | 伊那市教育委員会
伊那市文化財審議 |
| 3. 舟山遺跡(第1,第2次) | | 駒ヶ根市教育委員会 |
| 4. 羽場下,舟山遺跡 | | 駒ヶ根市教育委員会 |
| 5. 中越遺跡(第1次・2次) | | 宮田村教育委員会 |
| 6. 中越遺跡(第3次) | | 宮田村教育委員会 |



南側より眺む



東側より眺む

図版 1 遺跡全景



遺構配置

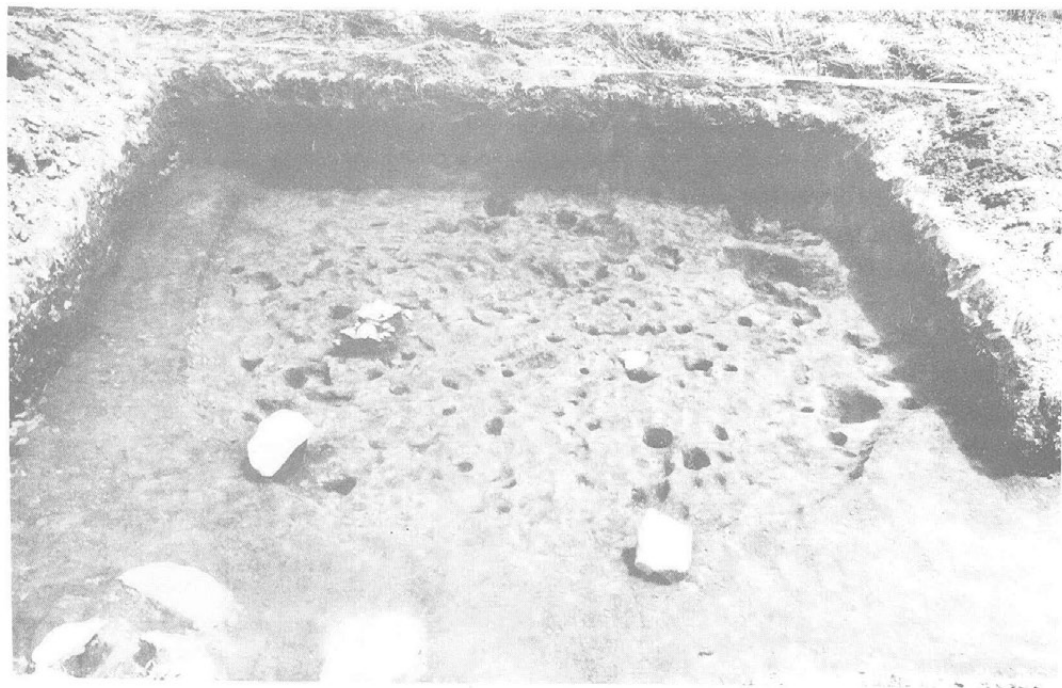


第 1 号住居址

図版 2 遺構配置及び遺構（住居址）

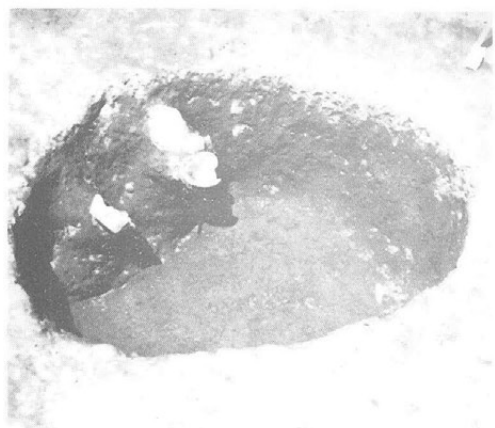


第 2 号住居址



第 3 号住居址

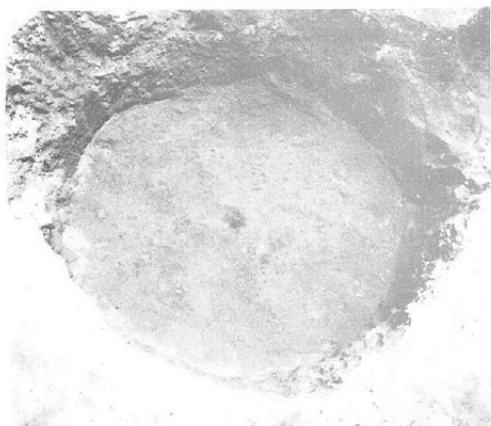
图版 3 遺構（住居址）



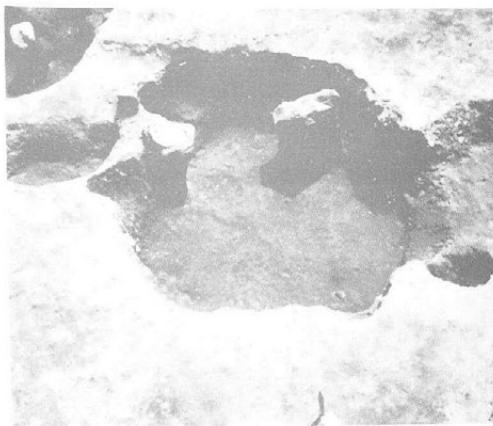
第1号竖穴



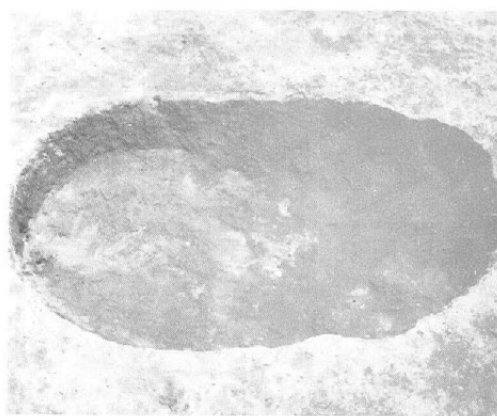
第2号竖穴



第3号竖穴



第4号竖穴



第5号竖穴



第7号竖穴

图版4 遺構（竖穴）



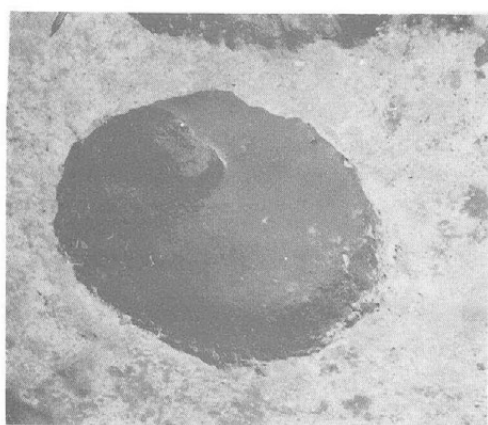
第 8 号竖穴



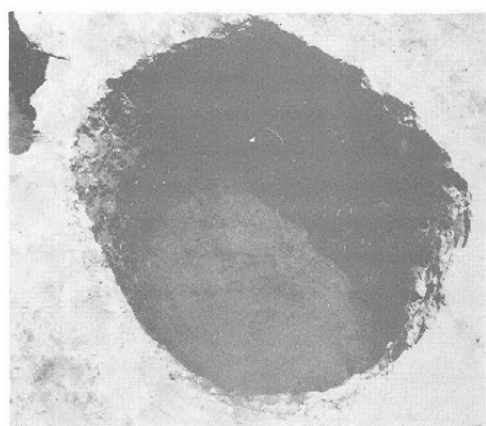
第 9 号竖穴



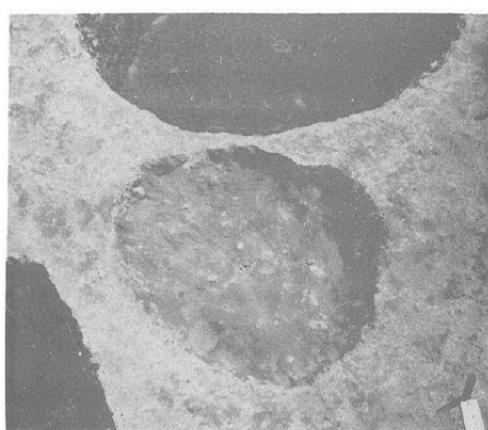
第 10 号竖穴



第 11 号竖穴



第 12 号竖穴



第 13 号竖穴

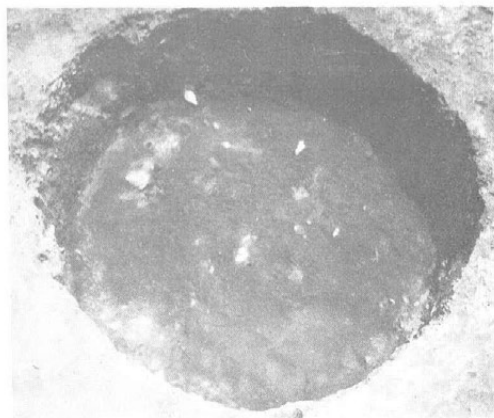
图版 5 遺構（竖穴）



第14号竖穴



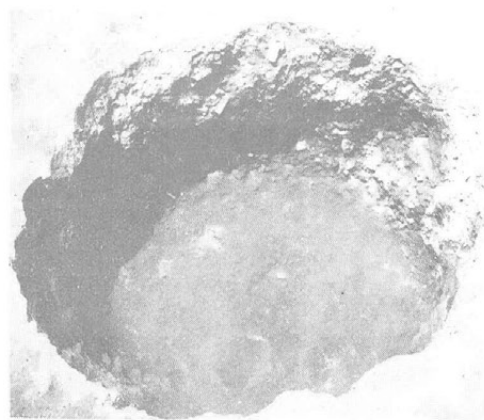
第15号竖穴



第16号竖穴



第17号竖穴

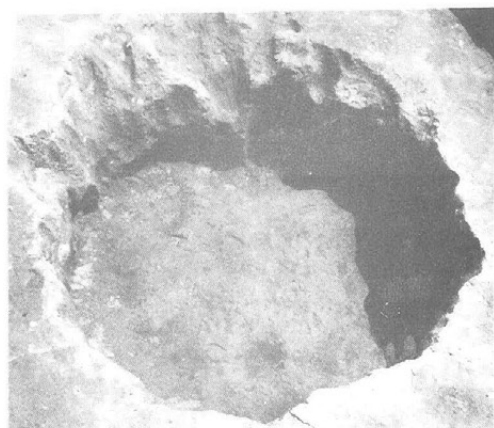


第18号竖穴

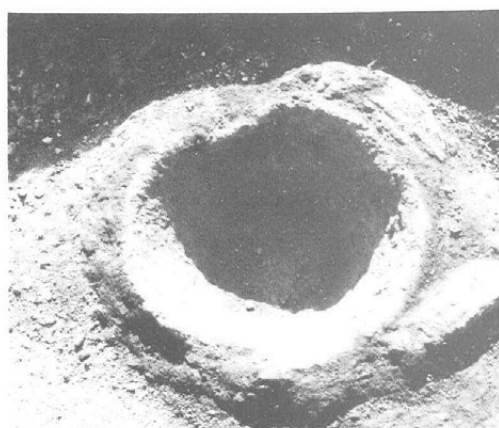


第19号竖穴

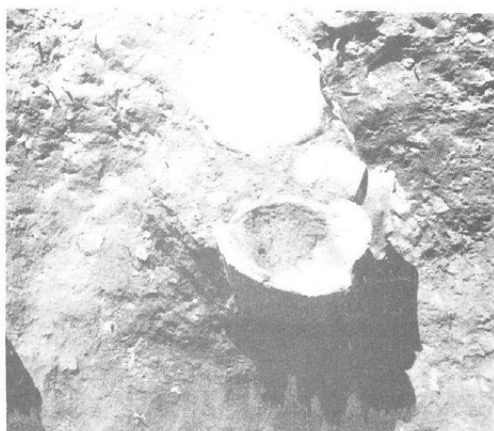
图版 6 遺構（竖穴）



第20号竖穴



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况

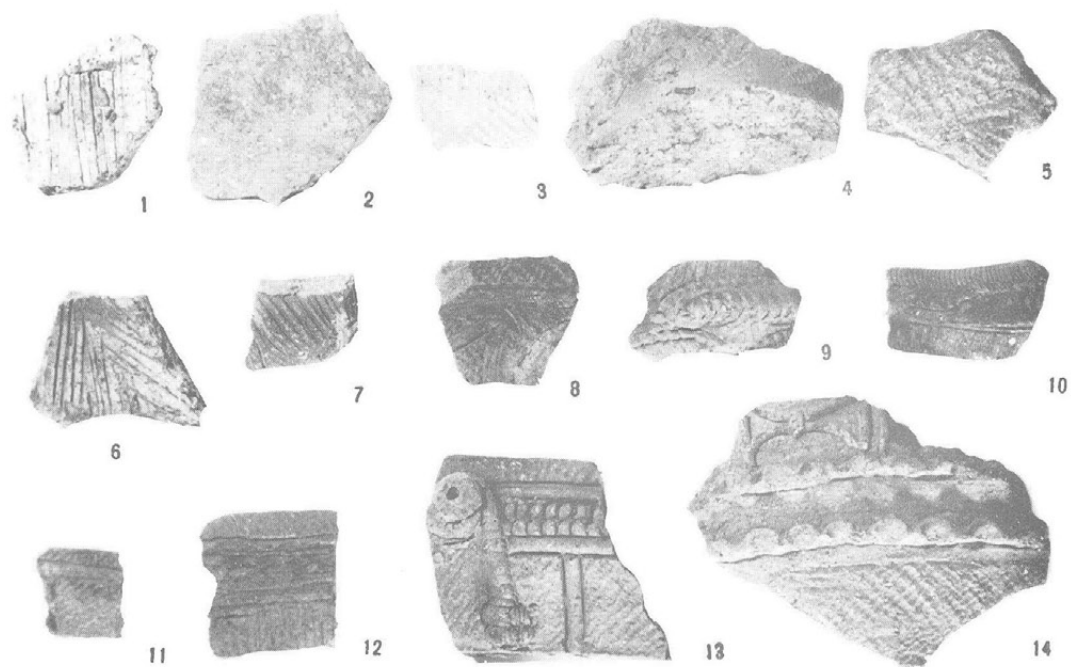


土器出土状况

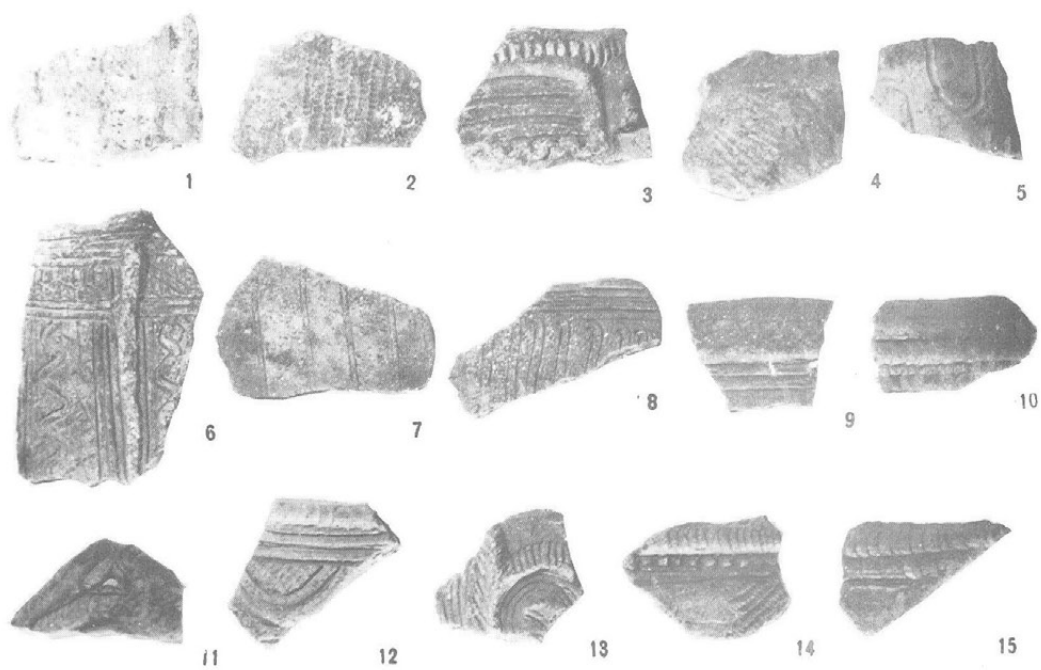


石器出土状况

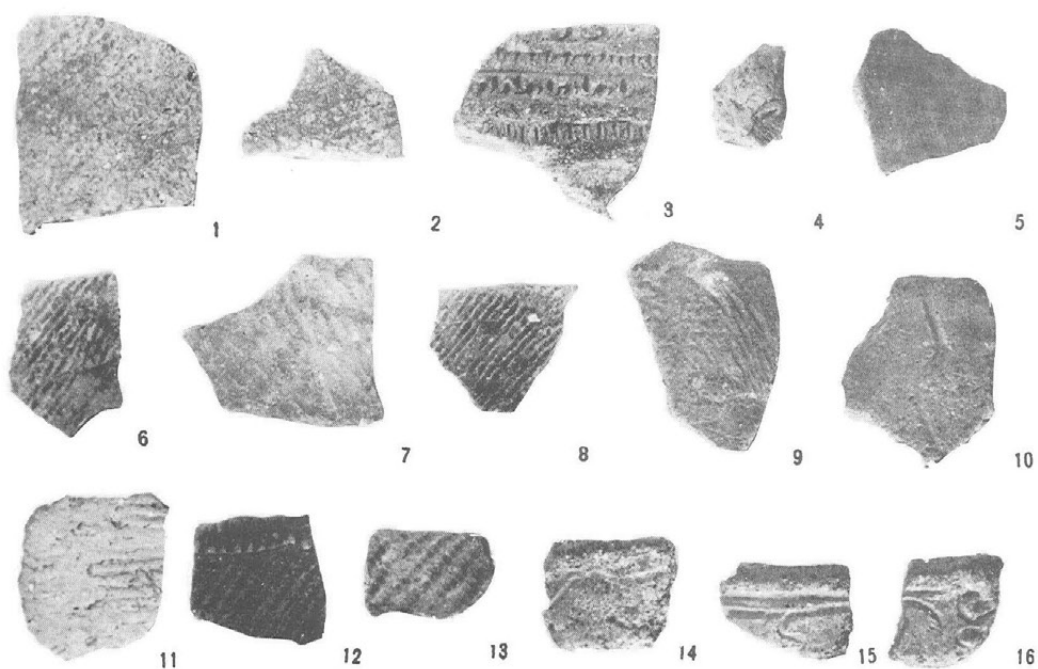
图版7 遺構（竖穴）及び遺物出土状况



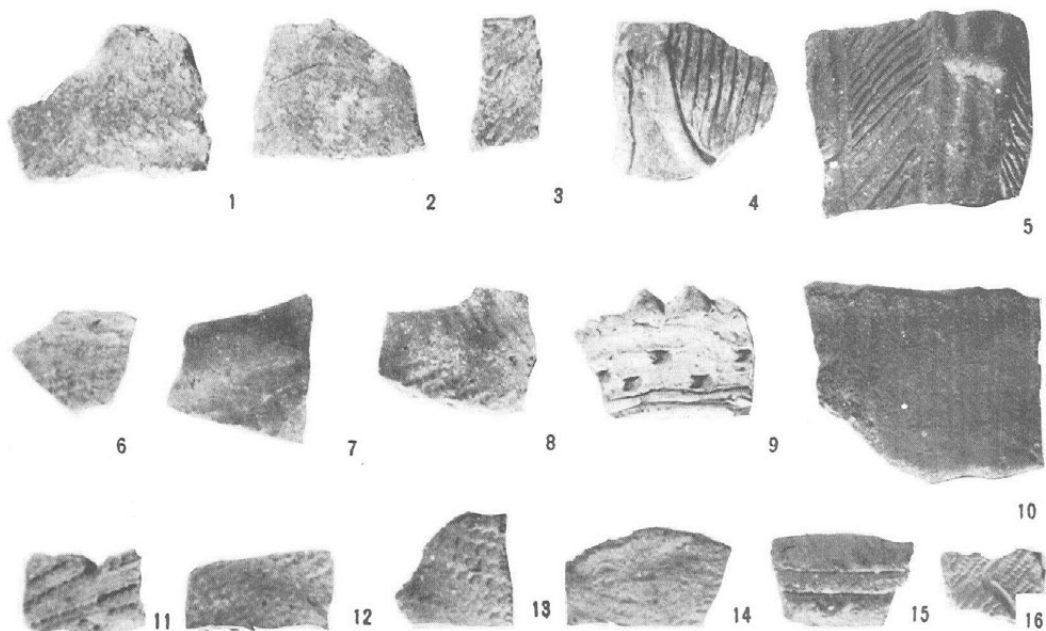
图版 8 出土土器



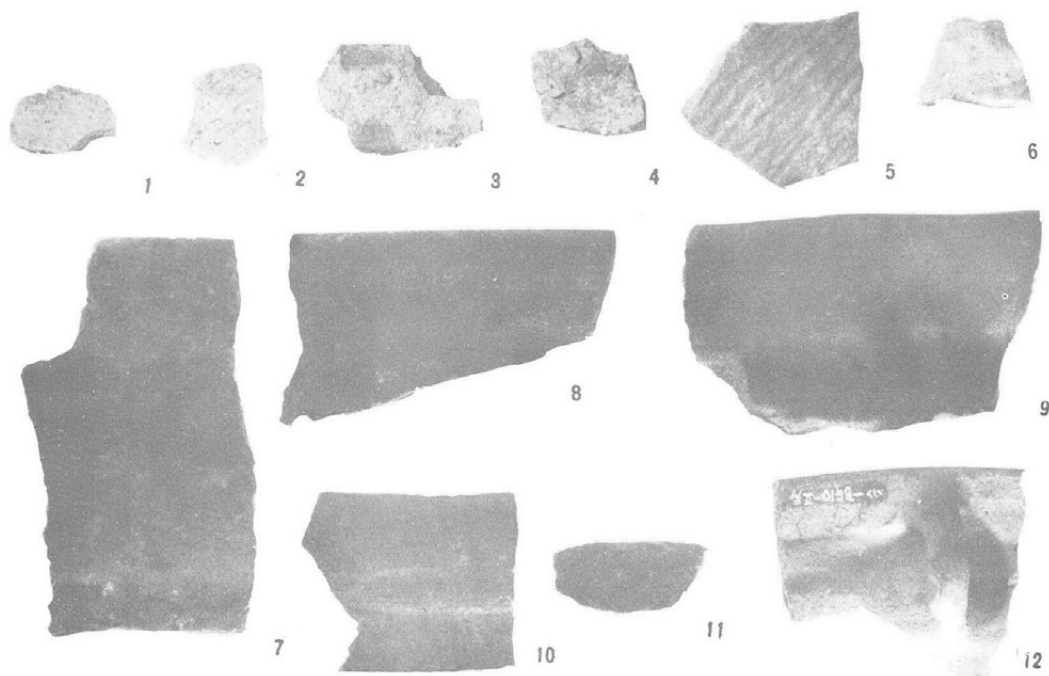
图版 9 出土土器



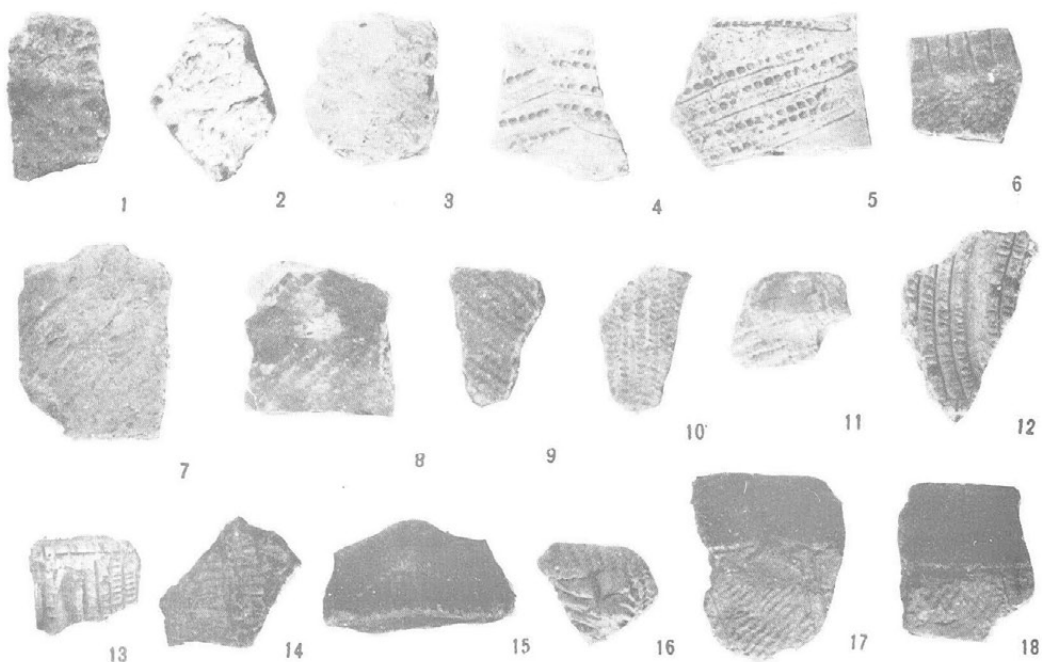
图版 10 出土土器



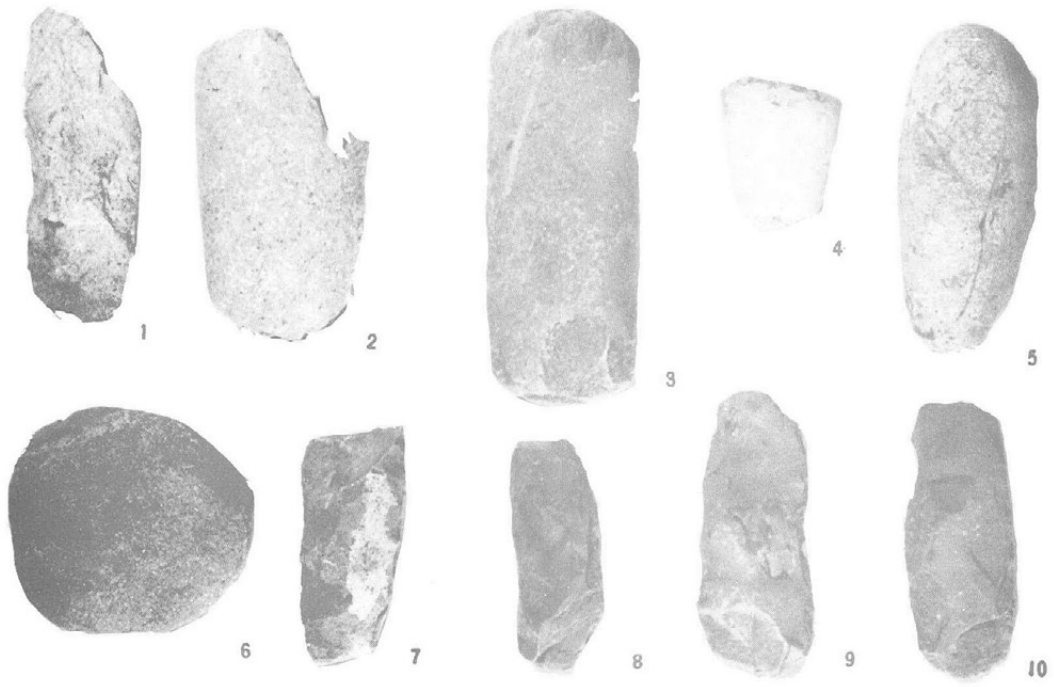
图版 11 出土土器



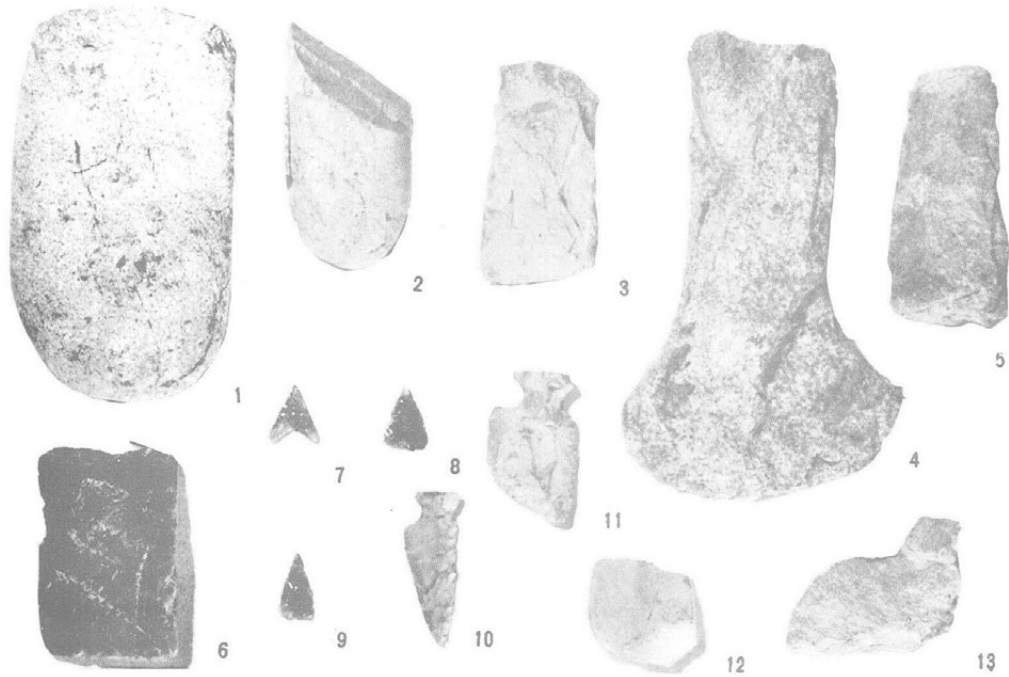
图版 12 出土土器



图版 13 出土土器



图版 14 出土石器



图版 15 出土石器

浜射場遺跡



目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図表目次	(4)
図版目次	(4)
第 I 章 発掘調査の経過	(5 ~ 7)
第 1 節 発掘調査の経緯	(5)
第 2 節 調査の組織	(5 ~ 6)
第 3 節 発掘日誌	(6 ~ 7)
第 II 章 遺 構	(8 ~ 10)
第 1 節 住居址	(8 ~ 10)
第 III 章 遺 物	(11 ~ 12)
第 1 節 土 器	(11)
第 2 節 石 器	(12)
第 IV 章 ま と め	(13)

挿 図 目 次

第1図	遺構配置図（その1）……（8）	第4図	第2号住居址実測図……（10）
第2図	遺構配置図（その2）……（9）	第5図	第3号住居址実測図……（10）
第3図	第1号住居址実測図……（9）		

図 表 目 次

第1表	出土土器の形状一覧表（その1）…(11)	第3表	出土石器の形状一覧表（その3）… (12)
第2表	出土土器・陶器の形状一覧表 （その2）…(11)	第4表	出土石器の形状一覧表（その4）… (12)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景 …………… (14)	図版5	出土土器…………… (17)
図版2	遺構（住居址）…………… (15)	図版6	出土石器…………… (18)
図版3	遺構（住居址）及び遺物出土状況… (16)	図版7	出土石器…………… (18)
図版4	出土土器…………… (17)		

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 発掘調査の経緯

広域営農団地農道整備事業（通称，大規模農道事業）は西春近地区に於いて，本年度作物収穫後県営畑地帯総合土地改良事業と併行して行なわれることが当初より計画されていました。

西春近地区で大規模農道に関連した北条遺跡・常輪寺下遺跡は昨年発掘調査を実施し，多大な成果を得ることができました。昨年に引き続き，本年度は小出城（城南）遺跡と浜射場遺跡の両遺跡が該当しました。ここで取り扱う浜射場遺跡は8月下旬～9月上旬に行ないました。伊那市教育委員会は南信土地改良事務所より委託を受け，浜射場遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

8月17日，南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

第 2 節 調査の組織

浜射場遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
”	向山雅重	長野県文化財専門委員
”	木下 衛	上伊那教育会会長
”	原 益久	南信土地改良事務所長
”	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長
”	保坂九市	” 課長補佐
”	中村幸子	” 主事

発掘調査団

団 長	友野良一	日本考古学協会会員
副 団 長	根津清志	長野県考古学会会員
”	御子柴泰正	”
調 査 員	小池政美	”
”	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
”	清水 満	長野県考古学会会員

調査員	福沢幸一	長野県考古学会会員
”	太田 保	”
”	柴登己夫	”
”	長瀬康明	”
”	本田秀明	”
”	堀口貞幸	”
”	深沢健一	”
”	丸山弥生	国学院大学学生
”	赤羽義洋	”
”	石岡憲雄	”
”	館野 孝	”

第3節 発掘日誌

昭和49年8月22日 発掘器材の運搬，テントの設営，旧地主との折衝，並びに交渉をする。テント設営の適当な場所が見当らなかったために深妙寺の境内を借用した。テントの周囲には太木が繁茂し，残暑を防ぐには好適の地となった。

昭和49年8月23日 現在，用地内に桑畑が茂げり，旧地主と相談して6本トレンチを設定する。傾斜地だったので，上段と下段とに区別してする。下段には1号～3号トレンチ，上段には4号～6号トレンチと命名した。各トレンチは畑が不規則だったので，南北の長さは一定しておらなかった。6号トレンチの南側に住居址が発見され，第1号住居址とする。すぐにプランを確認し，掘り下げを開始した。割合に浅かったので完掘するのにそう時間を費やさなかった。結論的なものとして，本址は桑畑だったので，攪乱がきわめて顕著であり，壁高は，わずかに数cmにすぎなかった。

遺物はわずかに，縄文中期土器片，須恵器片，打製石斧が出土したが，時代の決め手になりえる可能性は微弱のように思われた。したがって，本址は何時代に位置づけできるかは現在のところ判然としない。4号トレンチの北側の用地の境界附近に多量の焼土が検出された。あまり焼土の量が多いので拡張してみると，プランが明らかとなったので，これを第2号住居址とする。西側は水田の土手が高く，東側は用地外で調査不能であったので，住居址の全体はわからずに終わった誠に残念であった。

昭和49年8月24日 第2号住居址の掘り下げをする。黒土の貼り床であったが，極めて良好な為に，割合に掘り下げが楽であった。遺物は土師器須恵器片が出土した。時代決定は明らかとなった。天気予報によると台風14号が接近しているとのこ



発掘風景

とで、来週調査があやぶまれる。

昭和49年8月25日 台風接近による雨降りの為に作業中止

昭和49年8月26日 台風の影響による豪雨の為に作業中止

昭和49年8月28日 台風の影響による豪雨の為に作業中止

昭和49年8月28日 台風14号の影響による豪雨が、昨日と不昨日にわたって猛威を奮った。その爪跡は各所にわたって稲をたおした。本日は昨日とうって変わって美事な青空が眺められた。湿度が多いとみえて、非常に蒸暑い一日であった。第2号住居址は黒土の貼り床なので、現時点で作業を進行させると、破壊される危険性があると思い、一日中かかってほすことにした。

戸沢川の右岸段丘の先端部の台地にグリットを設定する。グリットの設定内容はNo.24のセンター杭を基準として東側に9～8、西側に11～13、南側から北側にかけてA～Jまでとした。この地区全体をB地区と決める。3カ所グリットを掘り下げると、縄文中期、縄文晩期、土師器の土器片が発見され、遺構の存在は有望となった。

昭和49年8月29日 B E 8のグリットに多量の土器片と木炭が検出され、不思議に思い、掘り下げてみると、床面が見つかり、住居址と判明したので第3号住居址とする。ちょうど、同グリットは住居址内にすっぽりとはまった形であった。発掘面積が限られていたために遺構への望みは極めて希薄であっただけに、皆、安緒の感に酔いしれていた。

昭和49年8月30日 第3号住居址のプラン確認に重きを置いた。住居址内に大きな唐松が林立し倒すことが頭痛の種であったが、男性作業員の奮闘のもとに次々と倒されていった。木を倒してみると広々として、晩夏の太陽がさんさんと照りつけた。第3号住居址を掘り下げてみると、大部分が縄文前期終末期の土器が出土し、住居址としては珍しい時期のものであるとわかった。この度の一連の発掘では東方A遺跡の第1号住居址、小出城（城南）遺跡の第1号住居址の二カ所が前に発見されていた。午後一杯かかって完掘する。

昭和49年8月31日 第2号住居址は連日の晴天により乾燥してきたので、完掘並び情掃をする。東壁にカマドを持ち、四本柱の奈良時代の住居址だった。第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の写真撮影をする。

昭和49年9月1日 第1号住居址、第2号住居址、第3号住居址の実測をする。

昭和49年9月2日 遺構配置図の作製と発掘器材のあとかたづけをする。

(小池政美)

第Ⅱ章 遺 構

第1節 住 居 址

第1号住居址 (第3図, 図版2)

本址は調査地区の上段の桑畑最南部, 用地内の西端に発見された竪穴住居址である。

住居址の規模は南側は崖による破壊, 西側は用地外によってその全貌は不明である。東側から北側にかけて現存する壁の曲線より推定するに直径4 m 50cm~5 m程の円形プランを呈する竪穴住居址である。

住居址の切り込み面は表土層から20cm位下ったローム層面を掘り込んで構築されている。

現存している壁高は10数cm程を測り, 状態は内傾気味で凹凸が著しい。床面はわずかに凹凸があり, 極めて固いローム層の叩きであった。柱穴は全体が掘れないので不明である。

遺物は縄文中期土器片, 須恵器片, 石斧等が数点出土したが本址の時代決定になりえるには不十分であった。(小池政美)

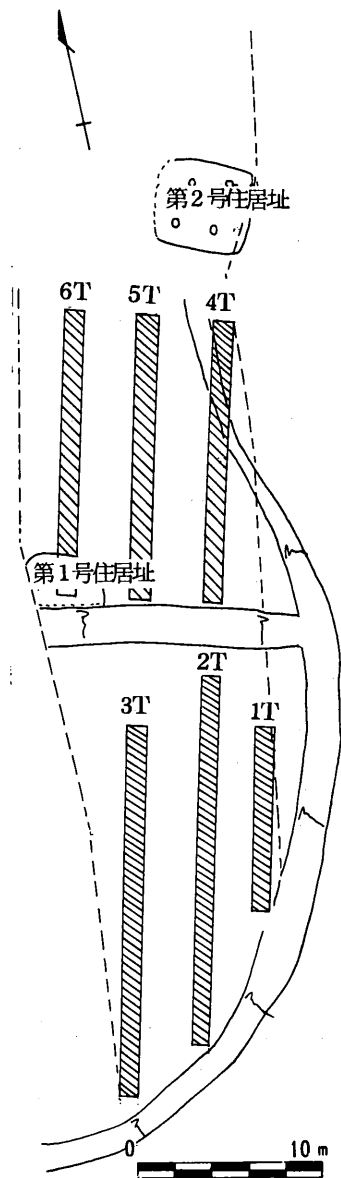
第2号住居址 (第4図, 図版2)

本址は畑作表土面より80cm程下った黒褐色土層面を掘り込んで構築した竪穴住居址で, その規模並びに平面プランは次の如くである。ただし, 西側は水田の土手が高く, 表土面より住居址しベル面までに3 m以上もあったので, 仕方なく調査を断念せざるを得なかった。幸にも南北はつかめたので, 推定ではあるが, おおよそ東西の規模も可能であろう。

南北4 m 50cm, 東西は推定, 5 m~5 m 50cm位の隅丸方形プランを呈している。

壁は西側を調査すれば, おそらく全周しているものと思われる。壁高は西側を除いて25~30cm程を示していた。基盤が北から南に傾斜していたために, 北側の壁面は褐色土層, 南側のそれは黒色土層であった。壁面は多少の凹凸があり, 割合にかたくできていた。

床面は黒色土層の極めて堅緻な貼り床で, ブロックの凹凸が認められた。



第1図 遺構配置図

(その1)

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに位置し、形状は石組粘土カマドで、芯になる石は板状のホルンヘルスの自然石であった。

支柱穴は4本あり、その配列は北東から南西にかけて対角線上にふれていた。配列としては極めて興味深いと思われる。

遺物はカマド内や床面上より土師器片や須恵器片が出土し、よって奈良時代の住居址である。

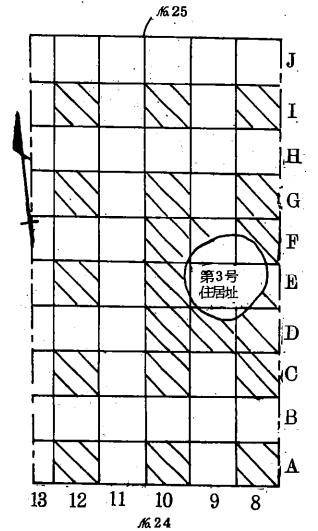
第3号住居址 (第5図, 図版3)

本址は今まで述べてきた、2軒の住居址と異って、少し離れて、戸沢川右岸段丘突端部に発見された唯一の住居址であった。唐松が一面に林立した中ではあったが、また、根が住居址内に伸びており、攪乱が及び、住居址としては満足するような状態ではなかった。

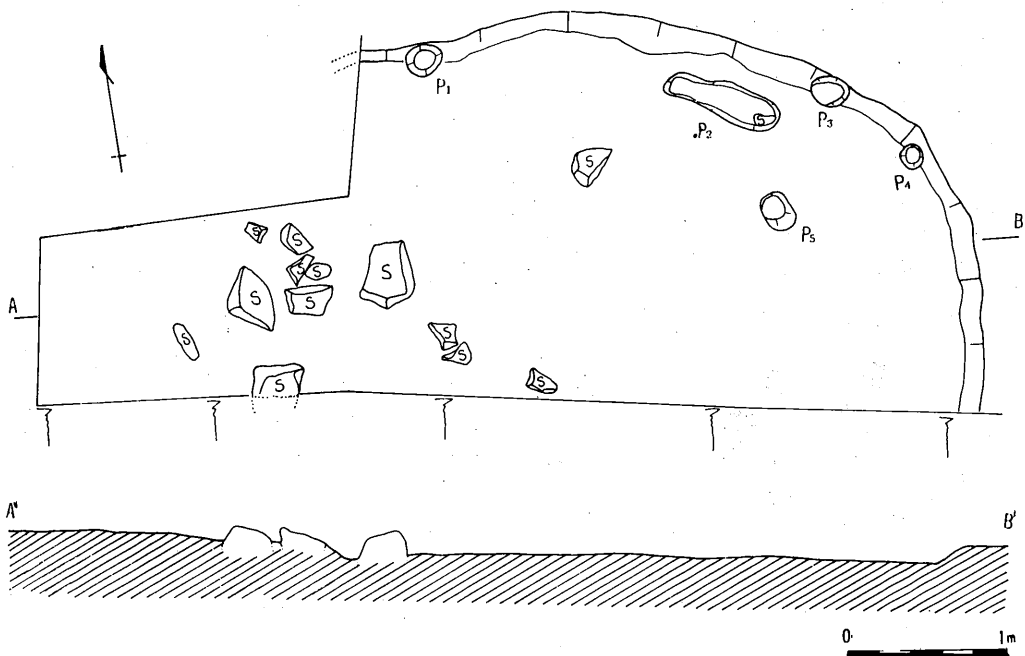
表土面から50cm位下のローム層を平均5~20cm前後掘り込んだ堅穴住居址で、円形プランを呈している。その規模は南北3m75cm, 東西3m65cm程を測定できる。

壁高は基盤が北から南への傾斜によって、北は高く、南は低くてわずかに数cm位であった。壁は軟弱で内傾気味であった。壁面全面にわたって唐松の根が浸透しているような状態だった。

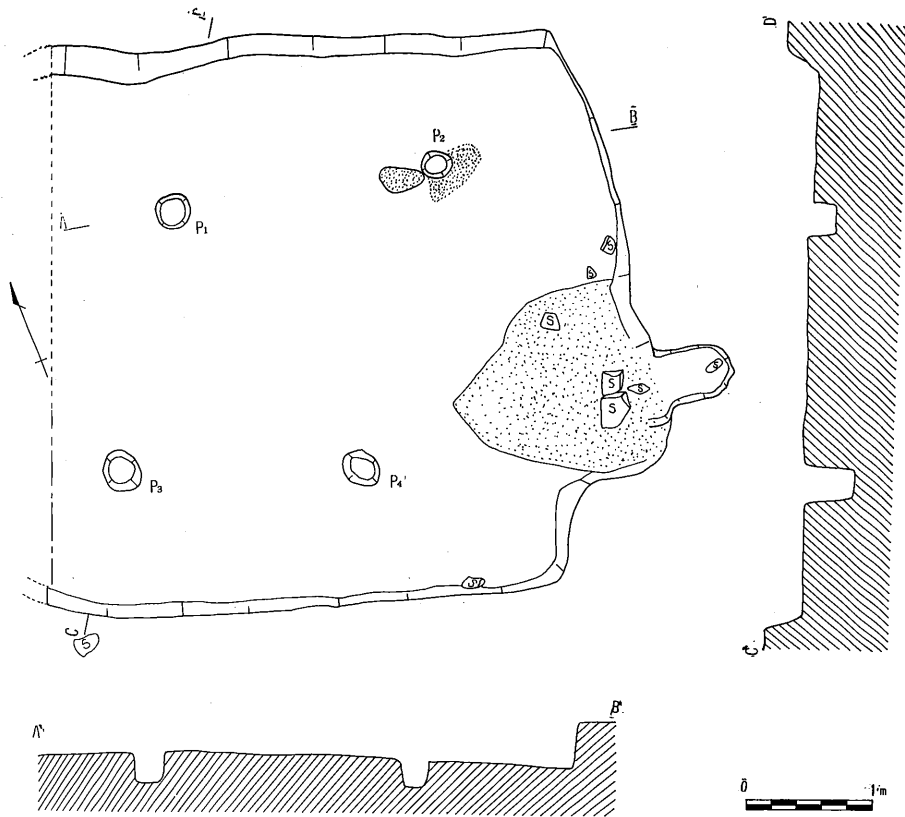
床面はローム層のわずかな叩きで、炉周辺は固く、他は軟弱であった。また凹凸が著しかった。



第2図 遺構配置図 (その2)



第3図 第1号住居址実測図



第4図 第2号住居址実測図

炉は中心よりやや南側に位置し、大きさは南北35cm、東西30cm程の規模で円形状に焼けておいた。

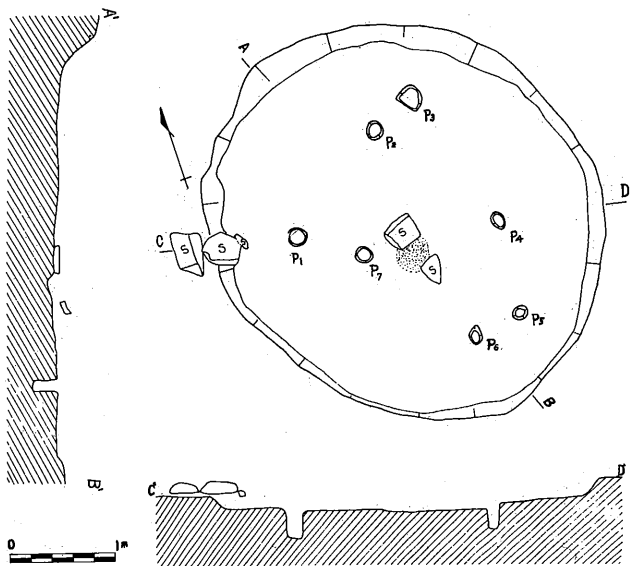
内部の状態は中央へ向って傾斜をし断面すりばち状を呈しているようだ。

焼土は凹みの中に充満しており、極めて堅くなっていた。炉の形態としては地床炉に含まれ、良好なものと思われる。

覆土中に多量の焼土と木炭が検出され、そのような状態から住居址とわかった。

遺物は縄文前期終末期の土器片が多量に発見され、よって同時代の住居址と思われた。

(小池政美)



第5図 第3号住居址実測図

第 Ⅲ 章 遺 物

第 1 節 土 器

土器の説明は表を作製し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容的説明を付記しておくことにする。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主観によるものである。(小池政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
4	1	少量の雲母	良 好	赤褐色	4	土 師 器	第 2 号住居址
"	2	"	"	"	5	"	"
"	3	"	良 好	白灰色	5	須 恵 器	"
"	4	"	"	赤褐色	"	"	"
"	5	"	"	白灰色	4	"	"
"	6	微量の長石	普 通	黒褐色	5	縄 文	第 3 号住居址
"	7	"	"	"	6	"	"
"	8	"	"	"	6	"	"
"	9	"	"	黄褐色	6	"	"
"	10	"	良 好	白灰色	3	縄 文	"
"	11	"	"	"	"	"	"
"	12	微量の雲母	普 通	黒褐色	4	縄文, 粘土, 刻目	"
"	13	"	"	赤褐色	5	沈 線	"
"	14	微量の長石	"	黒褐色	6	沈 線	"
"	15	少量の長石	"	"	"	"	"
"	16	"	良 好	"	5	"	"
"	17	"	"	赤褐色	6	縄文, 粘土紐	"
"	18	"	"	"	7	"	"
"	19	微量の雲母	普 通	黒褐色	6	縄文, 刻目, 内面縄文	"

第 1 表 出土土器の形状一覧表 (その 1)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
5	1	多量の繊維	普 通	黒褐色	10	刺突文, 条痕文	グリット
"	2	"	"	赤褐色	8	縄 文, 条痕文	"
"	3	多量の長石	不 良	黄褐色	8	縄 文	"
"	4	"	普 通	赤褐色	8	沈 線	"
"	5	少量の長石	良 好	黄褐色	4	縄 文	"
"	6	"	"	黒褐色	5	縄 文, 粘土紐	"
"	7	"	不 良	黒褐色	7	縄 文, 粘土紐	"
"	8	多量の長石	"	白灰色	6	沈 線	"
"	9	少量の雲母	良 好	"	5	"	"
"	10	多量の長石	"	"	6	"	"
"	11	"	"	黒褐色	6	変 形 工 字 文	"
"	12	"	"	白灰色	5	"	"
"	13	"	普 通	赤褐色	6	土 師 器	"
"	14	多量の雲母	良 好	黒褐色	4	"	"
"	15	"	"	白灰色	4	灰 釉 陶 器	"
"	16	"	"	"	4	灰 釉 陶 器	"
"	17	"	"	黒茶色	3	鉄 釉	"

第 2 表 出土土器・陶器の形状一覧表 (その 2)

第2節 石器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。

(小池政美)

図版	番号	名称	器形	石質	備考
6	1	打製石斧	短冊形	硬砂岩	第1号住居址
"	2	"	"	"	第2号住居址
"	3	"	"	"	"
"	4	"	"	"	"
"	5	磨石		"	第3号住居址
"	6	"		"	"
"	7	石錘		"	"
"	8	磨石		花崗岩	第2号住居址
"	9	打製石斧	撥形	硬砂岩	グリット
"	10	剥片石器		"	"

第3表 出土石器の形状一覧表

図版	番号	名称	器形	石質	備考
	1	打製石斧	撥形	硬砂岩	グリット
	2	"	"	"	"
	3	"	短冊形	"	"
	4	"	"	"	"
	5	"	"	"	"
	6	"	"	"	"
	7	磨石		"	"
	8	"		"	"
	9	石鏃	有茎	黒石	"

第4表 出土石器の形状一覧表

第Ⅲ章 まとめ

浜射場遺跡の発掘調査で検出された遺構は竪穴住居址3軒であり、その内訳は縄文時代前期1，奈良時代1，時代不詳が1であった。これらの遺構について以下若干の考察並びに今後の問題について加筆しておきたいと思う。

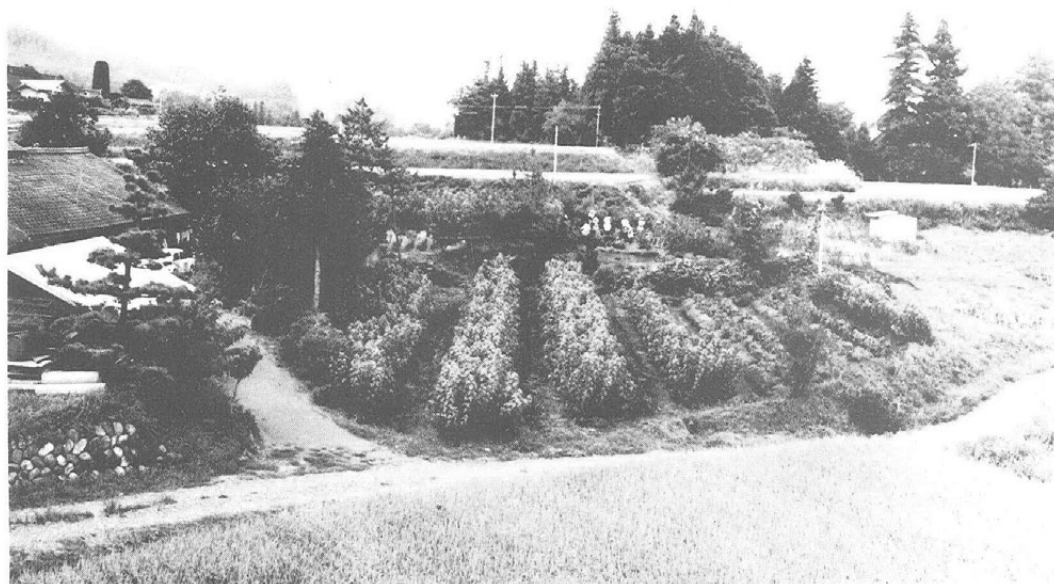
第1号住居址はたび重なる破壊のために全体の規模あるいは住居址としては全く見るも無残な状態であった。壁高は10数cmで、落ち込みを発見するには困難であって、むしろ床面の硬度より住居址と判断したような次第であった。

第2号住居址は道路用地内の東側ぎりぎりに検出された竪穴住居址である。西側は調査困難により、推定5m前後の隅丸方形の竪穴住居址である。本址の特筆すべき事項は黒土を掘り込んで構築され、しかも、また黒色土の貼床であった。

カマドは東壁の中央部よりやや南寄りにある石組粘土カマド、柱穴は4本あり、配列は対角線上になっていた。

第3号住居址は掘り込みが浅く、壁は内傾気味であり、床面は炉周辺はかたく、他は軟弱なところに特色がある。本址に限ってみると、炉は中心よりやや南寄りに位置した円形小規模の地床炉であった。

遺物は縄文前期終末期にあたる下島直後形式、大歳山式の土器片が出土し、上伊那に於いては数少ない住居址の1つである。
(小池政美)

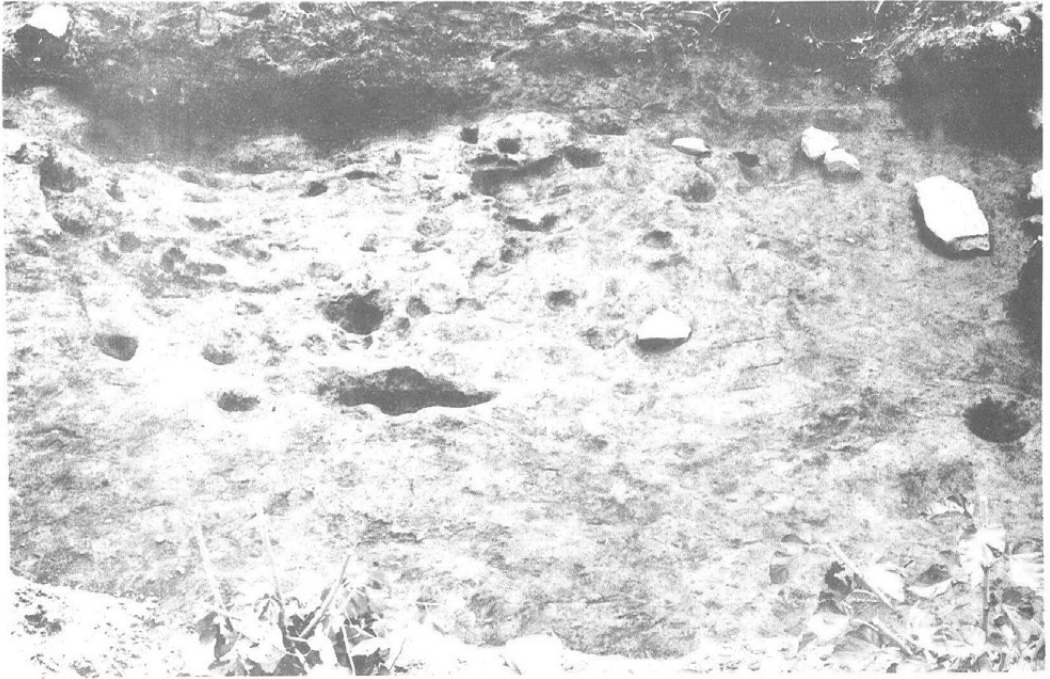


南側より眺む



東側より眺む

図版 1 遺跡全景



第1号住居址



第2号住居址

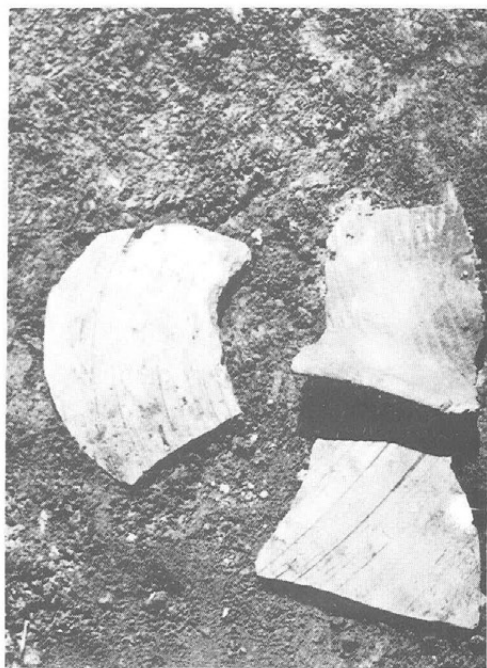
図版2 遺構（住居址）



第3号住居址

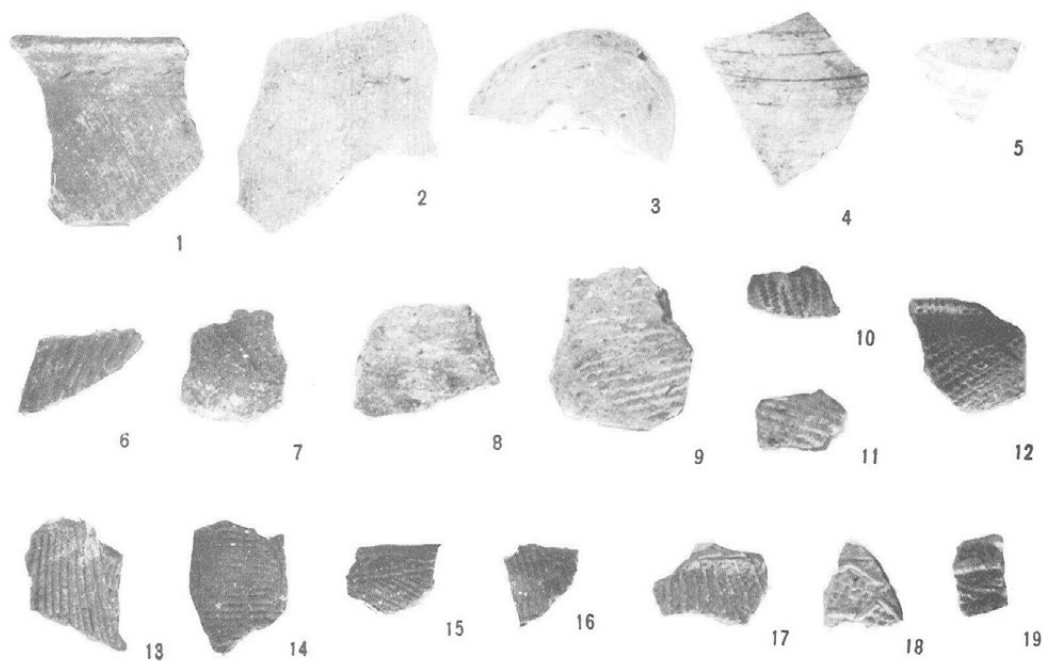


遺物出土状況

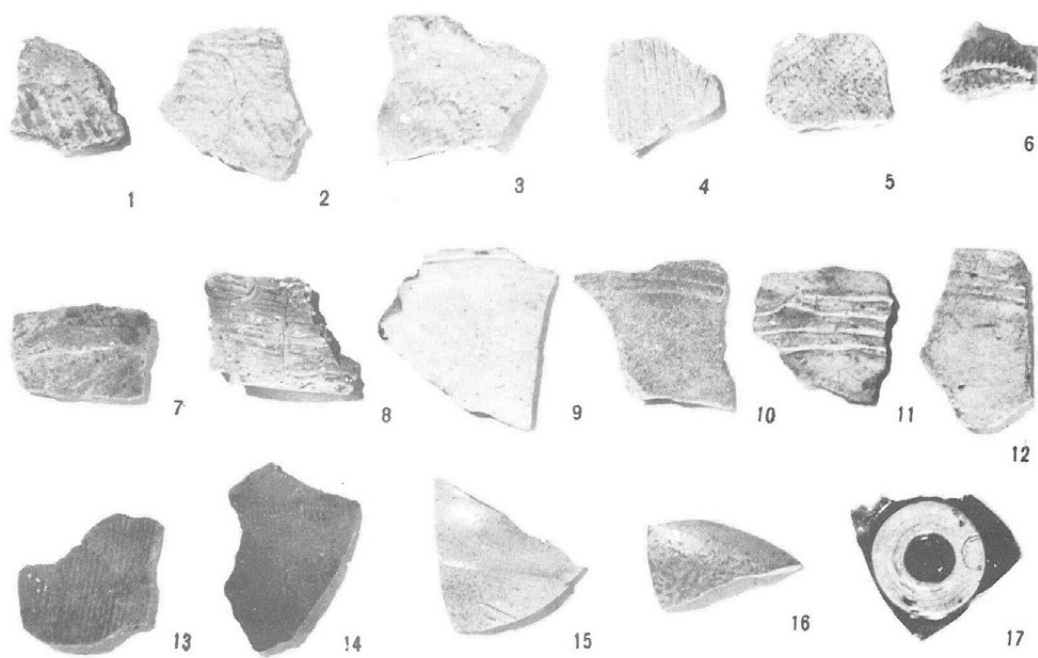


遺物出土状況

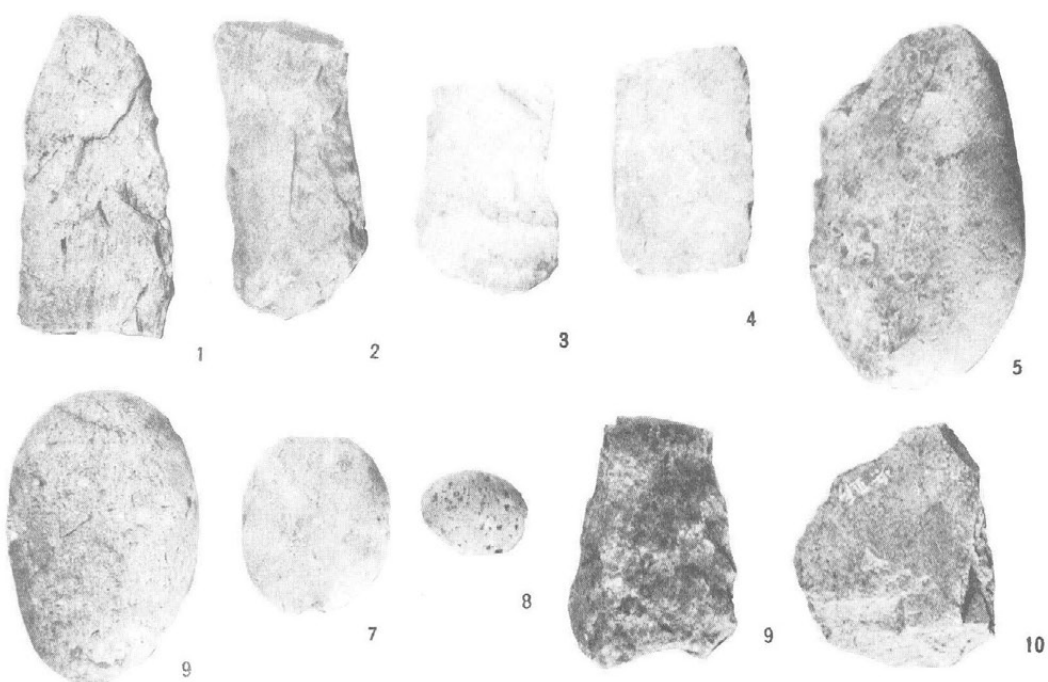
図版3 遺構（住居址）及び遺物出土状況



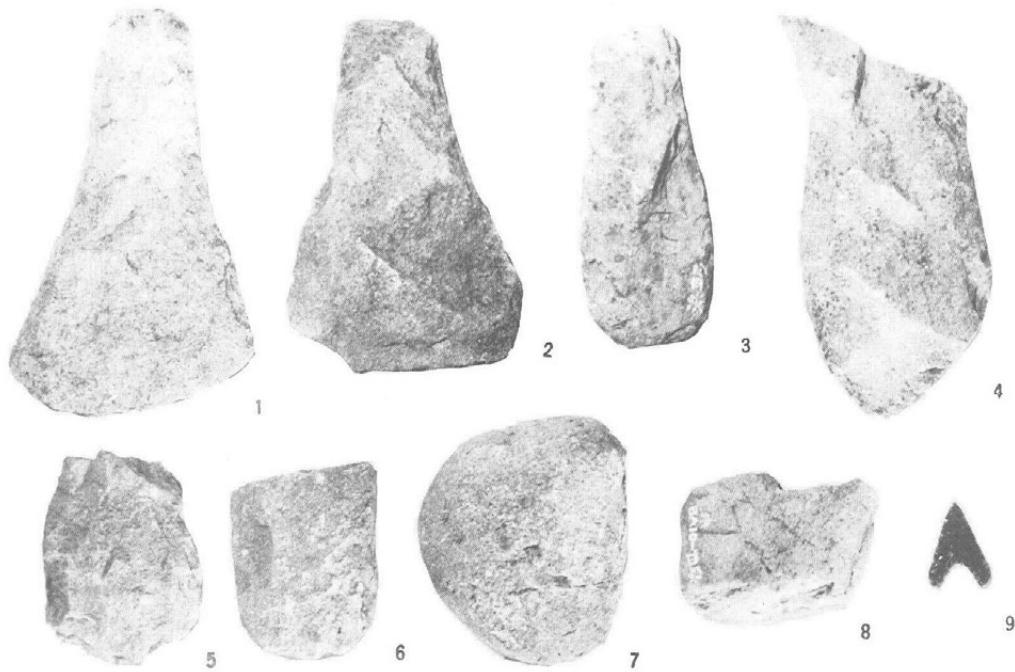
图版 4 出土土器



图版 5 出土土器



图版 6 出土石器



图版 7 出土石器

小出城(城南)・浜射場遺跡

—— 緊急発掘調査報告 ——

昭和50年3月15日 印刷

昭和50年3月20日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市美すず上大島
みすず創美社

